学習院女子大学
国際協力研修（ベトナム）
平成 27 年 2 月 27 日～3 月 9 日
報告書

学習院女子大学
Gakushuin Women's College

国際協力研修～ベトナム

目　次

国際文化交流演習にて
１．　ベトナムの歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
２．　ベトナム戦争・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
３．　ベトナムと日本の教育・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
４．　ベトナムの環境教育・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
５．　ベトナム料理と日本料理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
６．　日本の行事と歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０

活動報告
ドンバ市場とアオザイオーダー／Tran Thi Tam・・・・・・・・・・・・３２
山岳少数民族との交流／村田莉菜・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３３
ティエンムー寺院と王宮／石丸　真有・・・・・・・・・・・・・・・・ ３５
ベトナム戦争体験者（ニエン氏）の講話と質疑応答／浜崎　友里・・・ ３６
JASS 代表 小山道夫氏の講演を聴いて／根本亜香里・・・　・・・・・３６
子どもの家の訪問～食と命の授業／佐藤　由理・・・・・・・・・・・ ３７
子どもの家の訪問～環境教育の授業／吉田　早希・・・・・・・・・・ ３９
子どもの家の訪問～味わい教育の授業／菅原　菜美・・・・・・・・・ ４０
フエ高等師範大学日本語学科学生との交流／古谷　理恵・・・・・・・ ４２
障害児リハビリテーションセンター平和村を訪ねて／雲田　理愛・・・ ４４
フールー小学校での交流／世良　新菜・・・・・・・・・・・・・・・ ４５
戦争証跡博物館／南　菜津香・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ４７
クチトンネル／藤本　そのこ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ４８

食と命の授業～ベトナムの風土と食を通して感じたこと・・・・・・・ ５１

フォトアルバム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ６５
編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ７１

国際文化交流演習にて

１．ベトナムの歴史　年表

☆→日本とベトナム間の出来事　★→日本またはベトナム人が出来事をどう考えているか

・数万年前　　山地の洞穴やがけの下の陰になるところに人が住み始めるシカ、イノシシなどの獣や、魚や貝、植物の実を採って、食料としていた。

・前 4 世紀　　ベトナム北部でドンソン文化が栄える。
（タインホア省のドンソンで銅鼓が発見される）
※銅鼓（青銅製の太鼓）青銅や鉄から作った道具が登場する。

・前 3 世紀　　秦の始皇帝の遠征で南海・象・桂林の 3 郡を設置する。
チョウダが中国南部に南越を建てる。

・前 111 年　　（約千年の中国支配の始まり）
前漢の武帝が南越国を征服し、日南・交趾などの 9 郡を設置する。

・40 年頃　　中国の支配に対して反乱を起こす。（徵姉妹の反乱）
※徵姉妹は中国に反抗した英雄として各地でまつられる後漢の洪武帝が鎮圧する。

・2 世紀　　ベトナム南部にチャム人がチャンパーを建てる（2 世紀～17 世紀まで続く）
インドと中国の文化に触れながら、独自の文化を開花させる。
※ヒンズー教の神々をまつるミーソン遺跡が発見される。

・622 年　　唐はハノイに安南都護府を設置する。☆日本はこの頃遣唐使を中国に送っていた。
その帰り、遭難した船がベトナム北部に漂着した。

・907 年　　唐が滅び、独立を試みたため、争いが続く。

・939 年～　　（呉朝）呉権が南漢の軍を破り、帝位につく。

・1009 年～　　（李朝）リコウウンが建国、3 代聖宗が国号を大越とする。

・（李朝）～1225 年

・1225 年～　　（陳朝）チャン＝フンダオの活躍でモンゴル軍の度重なる侵入を撃退する。

・（陳朝）～1400 年 独自の文字チュノムを作成
☆漢字を積極的に使用

・1428 年～　　（黎朝）レ＝ロイが明の支配を破って独立建国
☆日本人は鉄砲、火薬、生糸、絹織物、ガラス製品などを目当てに東南アジアに移り住み始め、日本町ができる

・（黎朝）～1527 年

・1532 年～（再び黎朝）

・1773 年　　西山党の乱（農民反乱）

・（黎朝）～1789 年

・1778 年～1802 年　西山党の支配、阮福映によって平定される

・1802 年～　　（阮朝）阮福映がピョニーの支援で建国。

・1847 年　　ダナンでフランス軍艦がベトナムの軍艦を撃沈

・1862 年　　第 1 次サイゴン条約締結でコーチシナ 3 省を割譲

・1882 年　　フランスのベトナム北部への侵略開始
・1887 年　　フランス領インドシナ連邦成立
・1894 年～1895 年
　　☆ 日清戦争に勝利した日本の話を聞き、日本に留学生を送る（ドンズー運動）
・1930 年　　ホー・チ・ミンが共産党を設立させる
・1940 年　　☆日本のベトナム侵略開始
・1944 年　　☆ベトナムはフランスと日本の両国に食糧を奪われ、大飢饉で 200 万人が飢え死する。ホー・チ・ミンがベトナム解放軍武装宣伝隊結成する。
・（阮朝）～1945 年
　　☆ 日本がベトナムを単独支配するため、フランスからの独立を宣言させる。
・1945 年 8 月　☆日本が第二次世界大戦に敗れたのをきっかけに独立しようという運動が始まる。
　　★現在ベトナムは日本に対して戦争のことを気にしていない親日国である。
・1946 年　　第一次インドシナ戦争
・1954 年　　ジュネーヴ休戦協定（北緯 17 度を分断ラインにする）フランス撤退する。
・1965 年　　アメリカの北ベトナムへの爆撃開始
　ベトナム戦争（ベトナム民主共和国ＶＳベトナム共和国）（アメリカでは反戦運動が高まる）
　　☆日本は南ベトナムとアメリカの味方をする
・1962 年　　第二次インドシナ戦争
・1966 年　　ホー・チ・ミン死去する。
・1973 年　　パリ和平協定でアメリカ撤退
　　☆日本ベトナム国交樹立
・1975 年　　ベトナム戦争終了
・1978 年　　第三次インドシナ戦争
・1976 年　　ベトナム社会主義共和国成立
・1986 年　　ドイモイ政策が奏功
・1991 年　　高い経済成長を遂げる
・1993 年　　フランスと和解
・1995 年　　アメリカと国交正常化し、ＡＳＥＡＮ加盟を果たす。
　　初めての民法も完成する。
・2012 年　　★ベトナムと日本の関係は最盛期とベトナム大臣は語る。
・2014 年　　☆日越外交関係 40 周年

〈参考文献〉

『はじめてであうアジアの歴史』歴史教育者協議会、あすなろ書房、1999 年
「最近のベトナム情勢と日ベトナム関係」外務省最終アクセス日 2014 年 11 月 5 日
http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/kankei.html
「ベトナムフエの歴史と日本」最終アクセス日 2014 年 11 月 5 日
http://www.vietnamhuetour ism.com
「ベトナムと日本との関係」ベトナムの声放送局　最終アクセス 2014 年 11 月 5 日
http://vovworld.vn/ja-JP/%E8%A7%A3%E8%AA%AC/%E3%83%99%E3%83%88%E3%83%8A%E3%83%A0%E3%81%A8%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%A8%E3%81%AE%E9%96%A2%E4%BF%82/182010.vov

２．ベトナム戦争

ベトナム戦争とはインドシナ戦争後に南北に分裂した戦争のことである。第二次世界大戦終了後フランスがベトナムを再植民地化しようとし、それに対抗したことがきっかけとなり始まった。

北部のホーチミンを拠点とする南ベトナム解放民族戦線が、南部のベトナム共和国政府軍に対する武力攻撃を開始したのは 1960 年のことである。北ベトナムはソ連や中国共産党の支援を受けていたため、フランスはこれに手を焼き軍隊を送るも、結局は手を引く形となった。これが第一次インドシナ紛争と呼ばれている。その後ソ連の勢力が東南アジアに広がることを恐れたアメリカが政治的介入をしてきた。選挙で統一を図ろうとしたものの合意は実行されず、北の軍事行動が始まり、アメリカ側も軍事介入を開始した。このことを一般にベトナム戦争という。どちらも一歩も引かず一進一退が続いた。しかしそのような状況が続く中、アメリカ国内で反戦運動が激化し、1973 年にアメリカ軍はベトナムから撤退した。そのあと南部が独力で戦ったが北ベトナムの猛撃にやられ 1975 年サイゴン陥落により終戦となった。アメリカを主体とする資本主義陣とソ連を主体とする共産主義陣との対立を背景とした戦いであった。

表１　ベトナム戦争の年表

1960 年	南ベトナム解放民族戦線が結成され南ベトナムに武力攻撃開始
1965 年	アメリカ軍による北爆開始
1968 年	テト攻撃開始、パリ和平交渉開始
1969 年	ホー・チ・ミン死去
1970 年	アメリカ軍カンボシアに侵攻
1971 年	アメリカ軍ラオスに侵攻
1973 年	ベトナム和平協定（パリ協定)、アメリカ軍ベトナムから撤退
1974 年	北ベトナムがプノンペン包囲
1975 年	サイゴン陥落、ベトナム戦争終結

表２　ベトナム戦争による死者

	南ベトナム軍	北ベトナム軍
推定戦死者	285,000	1,177,000
民間人死者	1,581,000	3,000,000

２−１．ベトナム戦争と日本

1945 年 8 月 15 日、日本が無条件降伏した時、反日独立運動を指導していたホー・チ・ミンは「ベトナム民主共和国独立宣言」の中で、ベトナムの独立はフランスの手からではなく日本の手から取り返したものだと強調した。５年間、日本の支配によってベトナムがこうむった人的・物的損害は莫大なものだった。このことから、反日感情を持つベトナム人が多くいたことは安易に想像できる。

■「日本国」視点のベトナム戦争

安全保障条約を低姿勢で締結していた日本は米国のベトナムに対する軍事介入が泥沼化する中でベトナム戦争へ組み込まれていった。西側援助の具体例として、安保の労務契約によりベトナム

戦争に備えた兵器の輸送に日本人で構成された船団を派遣したことや、第七艦隊のような軍艦の補修、休養地や駐屯地の提供、「細菌学者」「細菌研究職」「防疫専門職」「昆虫学専門職」「化学職」等を提供しベトナムで実施されていた細菌戦の基礎研究に協力していた疑惑等が挙げられる。日本政府もまた、「大東亜戦争」の時期に日本がベトナムに与えた損害を賠償することを口実に南ベトナムのゴ・ディン・ジェム政権を積極的に援助した。また、ベトナム戦争の勃発は戦後最大の不況に陥っていた日本に「ベトナム特需」をもたらした。物資の輸出や対外援助費・米軍の日本滞在費等、皮肉にも激化する戦争を利用し不況を乗り切ったのである。

■「日本人」視点のベトナム戦争

1960 年代前半からの日本の高度経済成長、東京オリンピックの開催等によって各家庭に普及したテレビを通して中継されたベトナム戦争の惨状は見る人に衝撃を与えた。アメリカ兵の残虐行為や無差別の「北爆」の様子は 20 年程前、日本も経験した空襲や焼け野原を想起させた。ベトナム民衆の境遇に思いをはせ、「自由と民本主義」を提唱するアメリカに強い失望を感じた。世論調査によると、ベトナム戦争関係国のなかでアメリカが一番悪いと考える人が 30～40%以上も占めていた。(NHK 放送世論調査所編『図説 戦後世論史』第二版より） 安保条約の「極東地域」にベトナムも含まれると誇張解釈しアメリカへ支持・協力をする日本政府を批難し反戦運動を起こそうとする動きもあった。しかし、日本政府はアメリカの指摘に呼応してメディアの批判を規制した。1965 年以降、労働者が中心となってベトナム反戦運動は高揚していった。約 211 万人が実力行使し、約 308 万人が職場大会に参加した。ジャーナリストの吉野源三郎や労働法学者の野平爾のような知識人・文化人も 10 月 13 日声明を発表しストライキを支持した。他にも沖縄の基地反対闘争、米戦車の搬出を身を挺して阻止した行動・ベトナム向け軍需品の輸送を拒否した船員の行動・米軍野戦病院の開設に反対する住民運動・帰休米兵の脱走援助運動・アメリカの戦争犯罪を調査し告発する弁護士を中心とした運動・戦うベトナム人民に医療品などを送るカンパ支援運動等の一大反戦運動が形成された。こうした反戦運動を受け、アメリカは当初のベトナムの軍事的制圧予定を変更し、なんらかの政治的・外交的な解決を迫られた。そして北ベトナムを相手とした和平会談に同意したのである。

ベトナム民衆の必死の抵抗こそ平和の実現に直結したとはいえ、日本を含む世界の反戦運動もまた、戦争終結の手助けとなった。

参考文献

吉沢　南『岩波ブックレット シリーズ昭和史 NO.12 ベトナム戦争と日本,1988,7 月 20 日,東京,岩波書店』、宮城大蔵『戦後アジアの形成と日本,2014 年 2 月 25 日,東京都,中央公論新社』

２−２．地雷

地雷とは、地上または地中に設置され、人や車両の接近や接触によって爆発して危害を加える兵器である。ベトナムやカンボジアに設置された地雷は、標的となる人の命そのものを奪うためのものでなく、重傷を追わせて戦争での戦力にならないようにさせるのが第一の目的とされていた。標的となった人は苦しみながら死を待つのみといったような人々が大半だったと言われている。戦争から 40 年以上たった今も当時地雷によって負傷した人々や、不発弾や残った地雷の撤去作業などにより負傷した人々の治療やリハビリという課題がまだまだ残っている。ホーチミン市で開催された地雷・不発弾を題材にしたセミナーでベトナム全土に残る地雷・不発弾の撤去には 440 年もの年月がかかり、510 億ドルものコストがかかると言われた。1975 年以降、400 万もの地雷や不発弾を

撤去してきているのにも関わらず、未だにベトナムの国土の地中の 20%に地雷と不発弾が眠っているのが現状である。この 20%は、最も多くの地雷や不発弾が埋まっていると言われている地域である。

地雷の被害にあう人々の実に 62%が子どもたちである。クアンビン省外務局のグエン・ゴック・クイ局長によれば、1975 年から 2002 年までの間に、クアンチャック県、クアンニン県、ポーチャック県に残った地雷で 857 人もの人が死亡しており、被害者の大半は子どもたちと労働者だったと公表している。

２－３．枯れ葉剤について

2-3-1. 枯れ葉剤とは

・除草剤の一種であり、高濃度のダイオキシンを含んでいる。
・ダイオキシンの毒性はサリンの 2 倍、青酸カリの 1000 倍と言われている。
・がんの発生、奇形の発生、免疫の異常、発育の異常などを引き起こす。

2-3-2. ベトナム戦争における枯れ葉剤

名目上はマラリアを媒介するマラリア蚊や蛭を退治するためとされたが、実際はベトコンの隠れ場となる森林を枯らすため、またゲリラ支配地域の農業基盤である耕作地域を汚染し食糧の供給源を破壊することが散布の目的であったといわれている。

枯葉剤は 1961 年から 1975 年にかけてゲリラの根拠地であったサイゴン周辺やタイニン省やバクリエウ省のホンダン県などに大量に散布され、アメリカ復員軍人局の資料によれば確認できるだけで 8 万 3600 キロリットルの枯葉剤が使用された。散布面積の合計は 170 万ヘクタールで、南ベトナムのジャングルの 20%、マングローブ森の 36%に及ぶ。これは、四国全体の面積にほぼ匹敵する。散布地域と当時の集落分布をあわせて調査した結果、400 万人のベトナム人が枯葉剤に曝露したとされる。

2-3-3. 枯れ葉剤が及ぼす影響

枯葉剤散布地区では、流産が枯葉剤散布前に比べ 2.2～2.7 倍に、奇形は約 13 倍に確率が上昇した。また、ダイオキシンが精子に影響を与えるため、ダイオキシンに直接さらされなかったアメリカ兵士の妻までも影響を受けた。

☆ ペトちゃんドクちゃん

ベトナム戦争終戦後の 1981 年に下半身がつながった結合双生児として生まれた、双子の兄弟。2 人が生まれたのは多量の枯れ葉剤が散布されたベトナム中部高原のコントゥム省であり、母親は枯葉剤が撒かれた井戸で水を飲んでいた。このことから、2 人が結合双生児になったのは枯れ葉剤の被害の可能性があるとされている。

1988 年に分離手術が行われ、その後兄のベトは 26 歳で死去。弟のドクは現在病院の事務員として働いており、2012 年 8 月には東北を訪れ東日本大震災で被災した障害者たちと交流するなど、来日を重ねている。

日本ではベトナム戦争の被害のシンボルとされ、車椅子や義足が贈られたり、日本赤十字社が手術を支援したりするなど、日本と関わりも深い。

2-3-4．ベトナム戦争を扱った映画

映画は作り手がどの視点から描くかによって内容が変わってくるが、ベトナム戦争はアメリカで作られ、米軍兵士視点のものが多い。有名なものには「ランボー」がある。また、反戦的に描いているものが多くみられる。

☆プラトーン（1986）

この映画は、オリバー・ストーンという実際にベトナム戦争を経験した帰還兵が監督を務め、主題のプラトーンとは小隊という意味である。戦争の無意味さについて大きく取り上げており、現実に直面したからこそ描けたものである。

☆ワンス　アンド　フォエバー

アメリカとベトナムのどちらにも偏らず、両方の視点を平等に描いた映画である。ほとんどの映画がどちらかに偏った視点で描いている中では貴重な映画といえる。

☆天と地

アメリカで作られた映画だが、ベトナム人女性目線で描いており、ややベトナム側に偏っている。戦争の中で起きた宗教の違いによる論争について取り上げており、キリスト教と仏教の文化理解の障害と戦争の関わりについて描いている。

☆グリーンベレー

反戦的な映画が多いベトナム戦争映画の中では珍しいプロパガンダ映画である。アメリカ寄りの視点で、アメリカ政府の決定を支持し国威発揚を目的にしている。ジョン・ウェインが監督を務め、反戦を支持する世論に対抗して作られた映画である。北ベトナムをサディスティックに描いているという特徴がある。

３．ベトナムと日本の教育

３−１．ベトナムの教育政策

〈幼稚園〉

・「教育の社会化」…社会全体で教育を支える。 教育の諸負担を中央政府以外の様々な主体に負わせる。

効果…企業などによって設置される幼児教育施設が増加している。

半分以上の子どもが企業などによって設置された非公立の幼稚園に入る。

メリット…国全体の教育への関心が高まる。 政府の教育への負担が減少する。

デメリット…非公立は私立のようなものなので非公立の幼稚園ばかり増えて政府が教育施設の設置をしなくなった場合、家庭に経済的負担が発生する可能性がある。

〈小 中 高 大〉

・「外国語教育」…2008〜2020 年まで施行。 職業訓練や大学を卒業する人に外国語を使わせることを目標とする。

※高卒 職業訓練卒 大卒によって異なる。

①普通教育…小学校 3 年〜高 3 までの 10 年間教育。高校卒業時までに Level3 に達成することを目標とする。

②職業訓練…職業訓練学校などで実施される。

訓練学校卒業時までに Level2。職業訓練学校卒業時までに Level3 達成を目標とする。

③大学…外国語専門単科大学(3 年制)は卒業時までに Level4。

総合大学(4 年制)は卒業時までに Level5。

外国語非専門大学は卒業時までに Level3 達成を目標とする。

メリット…長期間、またそれぞれの卒業時に達成目標があるのでしっかりとした英語を身につけられる。

職業訓練学校でも普通教育の生徒と同じ英語力を身につけられる。

デメリット…小学校から英語を行うので小学校時に定着させておくべき他の教科の基礎が不十分になる可能性がある。

３−２．日本の教育の問題点

3-2-1. 詰め込み教育

詰め込みは、大学入試突破に目標を置き、膨大な量の知識だけをひたすら暗記し、なぜそうなるかなどの単純な疑問や創造力が欠如するものである。知識を知っているか知らないかで判断させるため、客観的に成績がつけられ、点数化しやすい特徴がある。

問題点は、テストが終われば忘れてしまい、本来の学習する意味がなくなり、積極的に学ぶ意識を育むことが難しくなるとされている。

詰め込む知識自体は重要であるが、考える能力も重要である。そのためには詰め込んだ知識を生かし活用することを考慮する必要がある。

3-2-2. ゆとり教育

ゆとり教育とは、1970 年代以降の詰め込み教育の反省に立って導入された教育論である。児童生徒の勉強の負担を減らしてその分ココロの余裕を確保し、より自由な発想を育むことを目的にした制度である。

授業時間の削減、日常の誘惑の増加、教師の質の低下、学力の低下の 4 つが問題視されている。

ゆとり教育による学力低下を受け、文部科学省は、主要教科書の充実を考えた。具体的には、すべての教科の基礎となる国語は国語力の育成を努めること。外国語は、異文化コミュニケーション能力を拡充し、国際舞台で活躍するのに十分な英語力を養えるような内容の授業をするように努めること。理系科目は論理的思考の育成に欠かせないので、より理解できるような内容の授業をするように努めるなど。そのためには、授業時間を増やす必要がある。そこで、条件や制限付きで、土曜日に授業を行うことや長期休業の短縮、課外を増やし、より内容の濃い学習する機会を与えるなど考えているようだ。また、文部科学省は、1 クラスあたりや生徒数を今まで定員が 40 人だったのを 35 人に削減することで、一人一人が充実した教育が受けられるようにしようとしている。そして、教育の質については、基本的に教育免許は大学卒業後に一度とってしまえば、定年まで失われることがない。しかし、ここに問題の原因があるとして、教育再生委員会は、教育免許を 10 年 1 区切りにし、その都度、研修を義務付けたり、場合によっては教育免許を失効させたりすることも視野に入れ、教師の質の低下をこれ以上進めないようになされている。

ゆとり教育によって子ども達の学力が低下したという意見が多く上げられている。この意見に対して、明確な因果関係がある訳ではない。しかし、授業時間が減り、子ども達の自由な時間が増えた一方で、その時間を自主学習に利用しているかと問われると利用していると応える子どもは少なく、ゲームやテレビ鑑賞などに時間を使っている子どもが多い。このように、勉強時間の減少が学力低下につながっていると考える。

3-2-3. いじめ

幼稚園・保育園では、小学校や中学校のようないじめはないという。積極的な子どもが消極的な子どもを従えているようにみえる「子ども同士の力関係」や「子どものコミュニケーション能力の未発達」による遊具等の横取り、手を出すことをいじめと捉えてしまう親がいる。

小学校では、「冷やかし」の割合が多いが、「仲間はずれ」の割合が、他の区分に比べ多い。国立教育政策研究所追跡調査によれば、小学校・中学校で「仲間はずれ、無視、陰口」が 3 年間の間全く無かった児童生徒は、それぞれ 22.6%、27.6%で、3 年間連続でいじめがあった児童生徒は小学校・中学校でそれぞれ 0.4%、0.6%であった。しかし、小学校でもいじめを苦とした自殺事件が起こっている。

中学校は統計上、いじめが最も多くなる年代である。国立教育政策研究所調査(2004-2009)によれば、学年別で見た場合、中学 1 年生だけで 17,063 件のいじめが認知されており、この数字は小学 6 年生（4,262 件）や高校 1 年生（3,701 件）に比べ 4 倍以上多い。男女比では、54.8%が男子、45.2%が女子である。

高等学校では「冷やかし」と「暴力をふるう」割合が高い。いじめによって退学する場合もある。先輩が後輩をいじめる事例もある。

大学においても特に体育会系のクラブで、先輩からの「しごき」という名のいじめは昔から存在する。これに関連して、継続的な悪質ないじめで、訴訟沙汰になった例もある。

これらから、学校の種類別により、いじめの原因が異なることが分かる。学校の種類別によって、対策を考えるべきだと考える。

3-2-4. 教育を題とした他の班との話し合いで出た日本の教育制度の問題点

創造力・批判的思考力の低下、読解力の低下、活字離れ、コミュニケーショ能力の低下などが挙げられた。具体例としては、授業中手を挙げる生徒が少ないことやディベート・人前に出ての発表が苦手なことが挙げられました。注目すべきことは「自国の文化を知らない」子どもが多いところであると考える。グローバル化が進む現代社会において、自国の文化を他国の人に正確に伝えられる能力が必要とされる。そのため、英語の授業の強化、日本の文化を取り上げた授業や体験学習を定期的に行うべきである。

3-2-5. 教師や親による子どもへの影響

近代、教師による児童・生徒への体罰が問題となっている。体罰を受けたことが原因で自殺してしまうことが起きており、事態は深刻化している。ネットでの調査では、日本の学生の 4 割以上が体罰を目撃又は、経験している。これは、教師の力が強いという話し合いの中で挙げられた問題点の具体例である。

一方で、教師の精神疾患による離職者が年々増加傾向にある。いじめ問題や保護者への対応など、教師にかかる負担が増加していることが原因とされている。また、原因の一つとして、親の子ども化、子どもの大人化が挙げられる。最近では、「モンスターペアレント」という言葉を耳にする。過剰で理不尽な要求をする親が教師を悩ましており、その弊害として、親の真似をし、教師に反抗する「モンスターチルドレン」も問題視されている。

このようなことから、教師へのメンタルケアが重要になると考える。

3-3. ベトナム教育と社会問題

ベトナムには大きく分けて３つの問題があります。

１つは環境問題である。ベトナムの環境問題は日増しに深刻化している。過去１０年間で平均７％の経済成長をとげた結果、経済発展の一方で産業公害や都市への人口集中が様々な問題を引き起こしている事は間違いない。特に、交通問題はベトナムの教育に大きな影響を及ぼしている。

現在の都心部でのオートバイの所有台数な６５０万台とされ、通学には保護者の送り迎えが必須となっている状態である。子どもが学校に行く為に時間を拘束されることは不就学に繋がるかもしれない。子どもが自分達だけで学校に通える安全かつ便利な環境が必要である。

２つめの問題は就学問題である。ベトナムは就学率が低く、貧困の連鎖も起こりやすい。就学率の低さの原因の１つは、教育制度が挙げられる。ベトナムでは教育の基盤になる初等教育が課金制で、成績が悪いと留年になり何度もやり直さなくてはならない。この教育の現状は、教育へのハードルが高くしてしまっていると判断される。

３つめは、雇用問題である。経済が発展し、雇用は拡大したが、外資系企業やサービス業についているのはほんの一握りである。荷役や運転手など不安定な職種についている人も多くいる。そういう人達は収入の低さや不安定さから、子どもの教育に十分なお金を支払うことが難しく、結果として子どもが不就学に陥りがちである。また、親自身も不就学であると無学でもやっていけると楽観視し、子どもに教育をほどこす事の意義が見出せない事もあるようである。その結果、子どもに教育よりも、使い走りや子守など仕事をして収入を得る事を求めてしまうケースも少なくないといいる。

これらの事から、対策として政府の政策や親への教育が必要であると判断される。

３−４．ベトナムにおける教育環境について

ベトナムにおける義務教育の最大の問題は学費がかかることである。日本では義務教育に学費はかからないが、ベトナムでは義務教育でも学費を納めなければならない。それため、子どもを学校に通わせない親が多いのである。そして、その数は年々増え続けている。2014 年度の調べでは 5 歳で学校に行かない子どもは 12.9%、6 歳から 10 歳までは 3.97%、11 歳から 14 歳までは 11.17%となっている。

一方、ベトナムは学歴社会ともいえる。そのため、遊ぶ時間がないほど子どもを塾に通わせる家庭が増えている。朝から晩まで学校と塾で勉強して家に帰るのが午後 9 時になることもめずらしくない。ベトナムの教育は大学進学のための知識を詰め込むだけであり、実際の社会で役に立つ知識とは思えない。このような社会であるがゆえに、大学の卒業証書や資格の証明書を不正に入手しようとする人も増えている。そして、都市と地方の子どもの学力格差は広がる一方であることは言うまでもない。

しかしながら、ベトナムの教育は悪いところばかりではない。徹底した教育の成果は国際学力オリンピックでの成績に表れている。2014 年のオリンピックでは金メダルが 6 つ、銀メダル 2 つを獲得している。

ベトナムの教育がもっとバランスのとれたシステムになればいいと思っている。

３−５．ベトナム教育のまとめ

〈ベトナム教育の現状〉

1981年以降、ベトナムでは初等教育(小学校)5 年、前期中等教育(中学校)4年、後期中等教育(高等学校)3 年の、5-4-3制を採用している。前期中学校までが義務教育である。後期中等教育は普通中等学校と、技術・職業学校とがある。高等教育は大学の学士課程が4年、大学院修士課程が2年である。全国純就学率は小学校:91.9%、中学 校:81.3%、高等学校 58.2%となっている(2010 年調査より)。

*その他の教育事情 ・Hoc themと呼ばれる学習塾もあるが、日本のような形態ではなく、学校の教師があいた時間や受験前に学校内で行なわれている。

・教科書が国定教科書1種類のみである。

・都市部では教育施設不足のため、午前組・午後組と分けられる 2 部制をとっている。また、学区制がないため、評判の良い学校に人数が偏る傾向にある。

・暖房など設備が徹底しておらず、冬には開校できない学校もある。

・自然が豊富で、屠畜なども行う家もあるため、食育・道徳面の教育が日本よりも進んでいるのではないか。

〈ベトナムにおける学力向上の要因とは〉

教員への聞き取り調査から、児童の学力が向上している理由として主に 4 点が挙げられた。(調査期間:ホアビン省農村部・・・2006 年 1 月、ハノイ市・・・2007 年 2 月下旬~3 月上旬)。

〈学力向上の要因〉

1. 学校設備の改善 ：ハノイ市の経済成長につれて学校の設備も改善されてきており、調査したすべての学校にはコンピュータ室や音楽室が完備されていた。ある学校では、10 年前は学校にテレビが 1 台しかなかったが、今ではすべての教室にテレビが完備されているという。ただし、これらの電気機器のクオリティは良くなく、故障することが多いなどの問題も残っている。さらに、多くの教室では机と椅子が児童の背丈に合っていなく、特に低学年の児童にとっては高すぎることもわかった。

2. 教員の質の向上：大卒の教員の増加により、教員の教授能力は向上してきている。 ただし、最近では外資系企業の雇用の増加や経済成長に伴う企業の給料の上昇に比べ、 公務員である教員の給与は上昇していなく、優秀な人材が教員になりたがらない。「未だに教員の質は高くない」と指摘する教員もいる。

3. 授業内容の増加：授業で教える量が増え、その難易度も上がっている。 例えば 90 年代まで、小学校 1 年生の算数の授業では 1〜10 までの数字しか使用していなかったが、現在では 1〜100 の数字を使った授業を行っている。

4. 家庭の経済力の向上：経済成長に伴い家庭の経済力は着実に向上している。児童の多くはもはや家庭で労働する必要はなくなり、教科書や文房具など最低限の学習用具を購入できるだけの金銭的余裕もある。最近では、放課後に児童を塾に通わせたり、家庭教師をつけたりする家庭も増えてきている。

※ベトナムでは、多くの教員が放課後に塾や家庭教師の副業をしている。

〈日本の教育の問題点〉

・ 家庭と学校の区別がうまくいってない　両親の共働き化で家庭教育の機会が減り、勉強がすべて家庭任せになる。たとえば、食育など本来家庭で教育すべきことが教育されてない。
・ 大学間格差 大学は多いが、難関大学に人が集中するために大学間格差が生まれる。入学先の大学レベルで就職先が決まる場合も多い。そのため難関大学に入るために、初・中・高等教育に費用を費やす家庭が増え、所得により教育レベルに差が出てくる要因につながっている。

・ 職業教育が行われていない企業と学校教育の分離が進み、企業任せになっている。教育方法も変えていく必要あるが、学ぶ意欲と目的を持っていない生徒が多いことが問題である。よって生徒自らがこれから社会に出ていくことを自覚し、受け身でなく、積極的に学んでいく姿勢を見せる必要がある。

・ 教育に対する公共支出が低い 教育に対する公共支出1位のデンマークに比べると、半分以下である。日本の教育に対する公共支出費は、GDP費の3.6%であり、これはOECD諸国の中でも最低水準である。この値は、GDP費や子どもの人数、物価などのばらつきもあるので一概にはいえないが、日本が他の先進諸国に比べ教育に対する公共支出費が低いことは否めない。これにより家庭の経済負担が増え、親の所得により学歴にも格差が生まれる。格差社会を助長する要因の一つになっている。

以上が日本の教育の問題点である。政府・教育現場・家庭の協力が必要であると感じた。教育の充実が日本の成長にもつながると思った。教育者側に対する給料も増やし、教育する側受ける側も、より意識をもって教育に打ち込めるのではないかと感じた。

〈日本の小等教育の改善策〉『子どもが健やかに育つために』

・家族や周囲の人たちとの関係を深める。かつての日本は、子どもの面倒は、家族(家族と言っても、核家族ではなく、三世代で暮らす大家族)や地域全体で見ていた。現在の日本社会は、子どもの教育を学校に任せ過ぎである。そこで、家族や周囲の人たちとの関係を再度見直すべきである。誰かが自分のことを見守ってくれていると感じられる環境があることで、安心感が得られる。

・学ぶ機会を得る。受験に必要な科目だけでなく、道徳や保健体育の授業をより充実させるべきである。将来仕事に就いたり、病気にかからないような衛生面の知識が得られたり、社会で暮らしていけるようになる。

・体験学習を取り入れる。受験戦争に勝つため、小さい頃から机での学習が中心になっている。学校以外でも塾に通うなど子どもの心に余裕がなく、いじめが社会問題となっている。そのため、生活体験、社会体験、自然体験をより多く取り入れるべきである。

・目的意識の希薄さ。よりよい大学に行くために多くの子どもたちが勉強している。しかし、そこで、何のために学ぶのかが分からなくなっている。親から言われ、大学卒というブランド欲しさに いやいや勉強している子どもたちも多いだろう。そこで、初等教育では、子どもたちが、向上心が持てるような工夫をするべきである。

〈まとめ〉

日本とベトナムの共通していることは、学ぶ機会を得ることと、教師の質が大切ということである。前者は、親の所得や教育への意欲が左右されてしまうことを防ぐ必要がある。そのためには、政府からの教育に対する支出が大きな論点となるだろう。後者は、教師は生徒に信頼・尊敬されるように、学ぶことの魅力を伝える必要もあるし、また生徒自身も信頼に値する人物として先生を見る必要もある。

今後も、政府、教師、生徒とその家族も含め国民が課題に取り組んで行く必要があるだろう。

４．ベトナムの環境教育　小学校の現状と課題

―目標―

・1980 年代から今までにわたる３回の教育改革の施行により、ベトナムの学校教育に大きな変化が見られる。

・ベトナム戦争勝利の後、国民教育は、建国と国を守るための社会発展と科学技術革新に対応できる人材を育てることを目標にし、総合技術教育は不可欠な教育分野となり、新たに『人口教育・総合技術教育・環境教育』という現代社会に対応する教育分野が学校教育のカリキュラムに取り上げられた。

・環境教育とは国や地域の環境を守るための具体的な教育。

環境教育を進めていくにあたっての目標として、

1. 環境教育の内容と方法は学校段階の目標と子どもの発達段階に応じ、小学校の教科書には、簡単な表象や地域の現象に基づき、環境教育のさまざまな面に関する基本的な概念の育成を目指すこと。
2. 環境教育の内容は一貫性を持ち、合理的に計画されること。
3. 環境の中で、環境を通して学ぶために、参観・観察・体験・実習などの学習形態・方法を通して行わなければならない。
4. 教科書における環境教育の具体的な内容には、たとえば以下のような学びのテーマがある。

e. g.

・４学年まででは道徳の授業においては、態度・関心を目的とした授業も多くある。

ものの大切さを学ぶ・・・「本やノートや文房具を大切にしよう」
植物保全　　・・・「木や花の保護」
公衆衛生　　・・・「学校や教室をきれいにしよう」
動物愛情　　・・・「動物たちへの関心」

・ 学年が上がっていくと知識や技能に重きを置いている。

（労働や自然・社会の授業を重視）

動物と人間の関わり・・・「鶏を育てる利益。我が国で流行している鶏のいくつかの種類」
水資源汚染　　・・・「地球上の水源」
貴重な天然資源保全・・・マングローブ

☆目標の欄を見ると

道徳科における環境教育の内容は、「ものの大切さや身近な植物・動物への愛情や公衆の場の衛生原則」などを子どもに考えさせるために、子どもの日常生活における身近な道徳的な状況をもとに学べるようなカリキュラムの目標となっている。高学年になるにつれて環境に対する知識と技能を目的とする単元が多く設定されている。

―問題点―

目標としては、環境や環境保護に対する態度の育成であるが、道徳的な状況の多くはまだ単純であり、児童が価値判断や意志決定するために必要な深く考える機会をあたえることはせず、教訓によって価値を教え込む傾向が強い。

例えば、「動物」という授業では、野生動物について、構造・外形特徴、繁殖場、利益・害が紹介され、利益のある動物に対しては、「守る」、一方で「害」のある動物に対しては「殺す」という結論まで児童に認識させている。環境教育の側面から見れば、動物を単純に「利」と「害」に分ける

ことはできない。この「利」と「害」という分け方はあくまでも人間中心の、目先の利益しか考慮されていないと考えられる。そのような教科書の内容は現場の教師の認識にさえも影響している。ここでの環境教育の内容は、環境問題を考えるのではなく説明する傾向が強く、子どもの思考力を向上させる面は弱くさせていると言える。

労働科における環境教育においては、子どもに植物・動物を世話する技能や行動などを身につけさせる目的となっている。また、健康科における環境教育の内容は他と比較して、一番多くなっているが、すべての教育において　、子どもに理論的に知識を教え込む形が未だ多く、実際に体験させて本質的意味を探る学習は、不十分であると思われる。

一番の問題としては、

肝心なベトナムでの具体的な環境問題が教科書に反映されていないことである。例えば、枯葉剤というベトナムで深刻な問題の一つは１学年から５学年までの教科書には一切触れられていない。また、児童が毎日直面しているドイモイ政策下の環境問題は教科書では重視されないと考えられる。つまり、教科書の内容は実際の問題などとまだ離れているように考えられる。

―解決策―

諸外国の環境教育の在り方を参考にしていくべき。

・環境に対する個人の価値観、態度、積極的な行動を育ませる教育。
・環境の中でor環境を通しての実践的教育
・教材の切実性。
・公害学習の良い点を生かし、「地域に根ざす」などの基本的な環境教育の考え方の見直し。

環境教育の実態調査　アンケート

小中高でどんな環境教育を受けてきましたか？
（受けていない場合は受けていないと答えてください。）

小学校

中学校

高校

どの教科で習いましたか。（受けていない人は未回答で構いません。）

〔　　〕

学校以外で環境教育を受けましたか？受けた方はどんな教育だったか教えてください。
（ベネッセの教材、こども向けのイベントなど）

〔　　〕

現在の環境問題について知っていることはなんである。か？（複数回答可）

〔　　〕

それはどこで知りましたか？

〔　　〕

どの程度知っているか？〇をつけてください。

１．原因や問題について詳しく説明できる。
２．大まかに問題について説明できる。
３．知っているが説明はできない。

その環境問題が原因で起きている事柄を知っているか？
（わからなければなしと記入してください）

〔　　〕

環境問題を知って気を付けていることはありますか。
気を付けるべきだが、できていないことはありますか。

〔　　〕

実際に、問題を知っていてもどうすべきかわからない事はありますか。

〔　　〕

このまま環境問題が進めばどうなると思いるか？

〔　　〕

ご協力ありがとうございました！！

５．ベトナム料理と日本料理

5−1．ベトナム料理の歴史と日本の関係について

ベトナムでは食事をする際に、箸やお茶碗を用いる。白いご飯を主食とし、お茶も飲む。また、米粉や小麦粉で麺やお餅も作り食べることがあり、これらは非常に日本に似ている。このようなベトナムの食文化には、歴史的背景が大きく影響し、100 年にわたりベトナムを支配してきた中国の影響を受けている。ただ、基本的にベトナムでは米食文化なので、麺類や春巻きにも小麦粉ではなく米粉を用いることが多いため、麺類は多少、柔らかめで、コシがないのが特徴といえる。また、ベトナムには小魚を塩漬けにして発酵させた魚醤（ヌックマム）という調味料があるが、これも中国の影響を受けている。調理方法の、炒める、蒸す、煮るなども中華料理の手法が広く取り入れられているが、魚の料理方法については直火で焼くことが多く、中華料理の手法ではなく、日本料理やカンボジア料理でよく用いられる方法で、その影響も多少受けているようである。一方、ベトナムの朝の風景で「フォー（麺)」と並んでポピュラーなものにフランスパンに挟んだサンドイッチがある。１９世紀にベトナムが中国から独立した後、フランスが侵略し、ベトナムを３分割して植民地支配した時期があった。フランスパンに挟んだサンドイッチなどはこのフランス統治時代のなごりである。中国の支配と比べると、フランス統治は短期であったが、比較的最近であるため、フランス食文化の影響を多く受けている。これらの影響の原因の一つにはフランス人がベトナムでプランテーション農業を展開させたことにあり、コショウやコーヒー、香辛料などの栽培がそれに当たる。ベトナムコーヒーにフランスパンという食事はベトナムの田舎でもごく一般的に見られる風景である。

このようにベトナム料理は中国、日本、フランスなど多くの国から影響を受けているが、私たちは日本でも多く用いられいわば日本の食文化を支えるといっても過言ではない大豆についてベトナムとの比較をしていきたいと思い調べた。

大豆は、今から約 4 千年前の中国で栽培され、今から 2 千年前の弥生時代に朝鮮を通じて、日本に渡った。昔の日本人は、肉食習慣がまだなかったため、タンパク質としての大豆は大変貴重なものであった。奈良時代には、中国との外交が盛んになり、味噌や醤油といった加工方法が伝わり、鎌倉時代になると、戦に向かう武士にとって欠かせないエネルギー源となった。

現在に至るまで、日本の大豆は主に、豆腐、醤油、味噌、納豆に姿を変えて私たちの食卓に並んでいる。中でも醤油、味噌は日本料理に欠かせない存在でありどの家庭にも置いてある万能調味料である。同じようにベトナムにも調味料を使用する文化があり、その種類も多様である。ベトナムにも日本のように豆から作られた調味料が存在する。トゥオンゴットと呼ばれ中華調味料ホイシンソースに由来する甘くて濃厚なペースト、日本と同様に大豆から作られた大豆醤油があり、同じように「濃口」と「薄口」の 2 種類がある。濃口醤油は煮物に、薄口醤油は主にタレをつくるのに用いられている。醤油と同様、味噌もベトナムには存在するが、日本のように豆の形が見えないペースト状の味噌とどちらかといえば納豆に近い豆の形を残した味噌の二つがある。ベトナムの味噌は日本の味噌のようにしょっぱいというよりはむしろ甘い味の味噌である。

ベトナム料理にも日本人の食卓と近い感覚を持つ調味料が多くあるため、ベトナムで日本の食文化を伝えるために、ベトナムでは異なった味、見た目、用いられ方をしている大豆を使って広めることができるのではないかと考えている。

そこで、私たちは醤油、味噌、豆腐を使って、味噌田楽、冷奴を現地に日本文化を継承するアクティビティとして用いたいと思っている。大豆は、ベトナムでも用いられていること、味噌、醤油、

豆腐は見た目、味、食感ともに異なり日本の食に求める多様性や繊細さ、味への敏感さを伝えることができるのではないかと考えたからである。

５−２．和食について

和食は、ユネスコ無形文化遺産に登録されている。和食という言葉から連想されるものは、寿司や味噌汁などと思われている。しかし、ユネスコ無形文化遺産に登録されたのは、個別の料理ではなく、和食全体にまつわる「食の文化」である。和食が無形文化遺産に登録された理由は主に４つある。

（１）見た目の美しさ　季節のうつろいを表現
（２）優れた栄養バランス
（３）新鮮な食材と調理
（４）年中行事の関わり

である。

5-2-1．アクティビティの提案

和食の概念と比較的一致しているという点から、我々はアクティビティとしてうどんを提案する。たとえば、見た目の美しさなどの点では、華やかなものも非常に美しいと考えられるが、日本特有の美としてあげられる「簡素・質素」をうどんは表していると思われる。特に、かけうどんなどは質素だからこそ、その中に美しさが垣間見られる。また、季節の移ろいは、旬の食材でも得られるが、「冷やしうどん」「あたたかいうどん」といううどん独特の方法で季節のうつろいを舌、さらには温度で感じる。また、うどんは小さい子どもも気軽に食べることが可能で、消化も比較的良いと思われる。そのほかにも、年中行事として年越しうどん・そばで、一年の終わりを感じることが可能だ。

1．だしについて

だしのうま味物質は、だし昆布の中から発見されたグルタミン酸、その後、鰹節からイノシン酸が発見された。日本人は昔からうま味というものに気づいていたが、長い間外国人には受け入れてもらえなかった。しかし、2000 年、舌に存在する感覚細胞にグルタミン受容体が発見されたことで、うま味が認識されるようになった。現在では、うま味は海外でも注目されるようになっている。理由としては、うま味成分は満腹感を引き出し、食欲を抑える効果が望まれると言われているからだ。

２．アクティビティ内容

今回のアクティビティの目的は、香りと食感について実際に食べてもらうことで、体験して学び楽しんでもらうというものだ。まず、ベトナムに乾燥したうどんを持っていく。（どのうどんを持っていくかは要検討）そのうどんを現地で茹で、食べるという至って簡単なものである。ベトナムの麺の食感と日本のこしのあるうどんとの違いを体験してもらう。ベトナム側の日本のうどんについての意見を聞いてみる。次に、うどんのつゆ。つゆは、昆布出汁、鰹だし、二つを合わせたものを飲んでもらうことで、「だし」というものを味わい知ってもらう。これは実際に現地でだしをとるつもりである。香りと味の違い、風味の変化を直接感じてもらう。そして一番美味しいと思っただしでうどんを一緒に食べ、味わってもらう。こうすることで、日本のだしと食感文化を味わってもらいたい。

３．まとめ

このアクティビティをすることによって、五感で日本を実感することができると考えられる。また、ベトナム料理フォーと日本の麺での米粉と小麦粉の違いを舌触りからも感じることが可能である。今回はうどんであるが、食感などの違いでは、タイ米と日本のお米を比較するという案もあがった。日本の発酵食品を代表する味噌とあわせて焼きおにぎりにしたら良いのではないだろうか。もう少し余裕があれば、食感の違いを幅広く感じられるようなアクティビティが出来たらいいのではないだろうか。

６．日本の行事と歌

１月

～歌～

お正月、一月一日

『お正月』　　歌手：童謡・唱歌　作詞：東くめ　作曲：滝廉太郎

もういくつねるとお正月
お正月には　凧あげて
こまをまわして　遊びましょう
はやくこいこいお正月
もういくつねるとお正月
お正月には　まりついて
おいばねついて　遊びましょう
はやくこいこいお正月

『一月一日』　　作詞：千家尊福　作曲：上　真行

年の始めの　例（ためし）とて
終（おわり）なき世の　めでたさを
松竹（まつたけ）たてて　門ごとに
祝（いお）う今日こそ　楽しけれ
初日のひかり　さしいでて
四方（よも）に輝く　今朝のそら
君がみかげに比（たぐ）えつつ
仰ぎ見るこそ　尊（とお）とけれ

～食べ物～

・おせち料理
（黒豆、数の子、田作り、伊達巻、紅白かまぼこ、栗金団、昆布まき等）
・雑煮
・七草粥
・おしるこ　　等

～花～

・梅
・ロウバイ
・椿
・スイセン等

２月

〈2 月の行事〉
3 日 節分
4 日 立春
8 日 針供養
11 日 建国記念日

〈季節の歌〉
『まめまき』
おにはそと ふくはうち ぱらっ ぱらっ ぱらっ ぱらっ
まめのおと おにはこっそり にげていく
おにはそと ふくはうち ぱらっ ぱらっ ぱらっ ぱらっ
まめのおと はやくおはいり ふくのかみ

『鬼のパンツ』
鬼のパンツは いいパンツ つよいぞ つよいぞ
トラのけがわ でできている つよいぞ つよいぞ
ごねんはいても やぶれない つよいぞ つよいぞ
じゅうねんはいても やぶれない つよいぞ つよいぞ
はこう はこう おにのパンツ
はこう はこう おにのパンツ
あなたもわたしも あなたもわたしも
みんなではこう おにのパンツ

〈季節の食べ物〉
恵方巻き、豆まきの豆（節分）
鰯（厄除け）
蕎麦（昔の大晦日）

３月

◎３月の行事
・おひなさま
・お彼岸
・春日祭（奈良・春日大社のお祭り）
・東大寺二月堂 お水取り

◎３月の歌
・早春賦
春は名のみの　風の寒さやウグイス

谷のうぐいす　歌は思えど
時にあらずと　声もたてず
時にあらずと　声もたてず
氷融け去り　葦はつのぐむ
さては時ぞと　思うあやにく
今日も昨日も　雪の空
今日も昨日も　雪の空
春と聞かねば　知らでありしを
聞けばせかるる　胸の思いを
いかにせよと　この頃か
いかにせよと　この頃

・春よ来い
春よ来い　早く来い
あるきはじめた　みいちゃんが
赤い鼻緒の　じょじょはいて
おんもへ出たいと　待っている
春よ来い　早く来い
おうちのまえの　桃の木の
つぼみもみんな　ふくらんで
はよ咲きたいと　待っている

・どこかで春が
どこかで春が　生まれてる
どこかで水が　流れ出す
どこかで雲雀（ひばり）が　鳴いている
どこかで芽の出る　音がする
山の三月　そよ風吹いて
どこかで春が　生まれてる

・うれしいひなまつり
あかりをつけましょ　ぼんぼりに
お花をあげましょ　桃の花
五人ばやしの　笛太鼓
今日はたのしい　ひなまつり
お内裏様(だいりさま)と　おひな様
二人ならんである。すまし顔
お嫁にいらした　姉様に
よく似た官女の　白い顔
金のびょうぶに　うつる灯(ひ)を
かすかにゆする　春の風

すこし白酒　めされたか
あかいお顔の　右大臣
着物をきかえて　帯しめて
今日はわたしも　はれ姿
春のやよいの　このよき日
なによりうれしい　ひなまつり
〇参考文献
http://www.worldfolksong.com/songbook/japan/spring.htm

4 月の行事

≪花見≫・・・花見（はなみ）とは主に桜の花を鑑賞し、春の訪れを寿ぐ日本独自の風習である。花見は奈良時代の貴族の行事が起源だといわれる。奈良時代には中国から伝来したばかりの梅が鑑賞されていたが、平安時代に桜に代わってきた。

≪入学式≫・・・学校に入学することを許可し、そのお祝いをする式典のことである。日本では一般に春の行事であるが、欧米では、一般に秋の行事である。なお、就学年齢に達した日から学校に通うなど、制度上、入学式が行えないところもある。

≪4 月の歌≫

『チューリップ』・・・井上武士作曲家。近藤宮子作詞家。チューリップの歌詞には、赤と白と黄色のチューリップが出てくるが、色の花言葉というのが赤は告白。白は失恋。黄色は実らぬ恋だそうだ。という事はチューリップの歌詞に込められている意味というのは、人の恋心を歌っているという意味を持つのではないかという解釈もあるそうだ。歌詞は『さいた さいた チューリップのはなが ならんだ ならんだ
あか しろ きいろ どのはな みても きれいだな　ゆれる ゆれる チューリップのはなが かぜにゆれて　にこにこ わらう どのはな みても かわいいな　かぜに ゆれる チューリップのはなに とぶよ とぶよ　ちょうちょが とぶよ ちょうちょと はなと あそんでる』

『春が来た』・・・高野辰之作詞、岡野貞一作曲。『春が来た』は、1910 年に『尋常小学読本唱歌』上で発表された日本の童謡・唱歌。春が来た、花が咲く、鳥が鳴く、というシンプルな歌詞の繰り返しによって、長く待ち望んだ春の到来への喜びが素直に表現された名曲。歌詞は『春が来た　春が来た　どこに来た　山に来た　里に来た　野にも来た　花がさく　花がさく　どこにさく　山にさく　里にさく　野にもさく　鳥がなく　鳥がなく　どこでなく　山でなく　里でなく　野でもなく』

５月

・行事
八十八夜、こどもの日(端午の節句)、母の日、立夏

・歌
「茶摘み」
夏も近づく八十八夜 野にも山にも若葉が茂る
「あれに見えるは茶摘みじゃないか あかねだすきに菅の笠」
日和つづきの今日このごろを 心のどかに摘みつつ歌ふ
「摘めよ摘め摘め摘まねばならぬ 摘まにゃ日本の茶にならぬ」
・食
菖蒲湯 柏餅　粽

６月

・行事
梅雨 虫送り 父の日 夏至
・歌
「かたつむり」
でんでんむしむしかたつむり
お前のあたまはどこにある
角だせ槍だせあたま出せ
でんでんむしむしかたつむり
お前のめだまはどこにある
角だせ槍だせめだま出せ
・食
タコ

7 月

・ 行事
海開き
富士山開き
七夕
祇園祭（京都）
海の日
土用の丑の日

・歌
海
海は広いな　大きいな
月がのぼるし　日が沈む
海は大波　青い波
ゆれてどこまで続くやら
海にお舟を浮かばして
行ってみたいな　よその国

夏の思い出
夏が来れば 思い出す
はるかな尾瀬 とおい空
きりの中に 浮びくる
やさしい影 野の小路
みず芭蕉の花が 咲いている
夢見て咲いている 水のほとり
しゃくなげ色にたそがれる
はるかな尾瀬 とおい空
夏が来れば 思い出す
はるかな尾瀬 野の旅よ
花の中に そよそよと
ゆれゆれる 浮き島よ
みず芭蕉の花が 匂っている
夢見て匂っている 水のほとり
まなこつぶれば なつかしい
はるかな尾瀬 とおい空

たなばたさま
ささのはさらさら のきばにゆれる
おほしさまきらきら きんぎんすなご
ごしきのたんざく わたしがかいた
おほしさまきらきら そらからみてる

8 月

・ 行事
立秋
お盆
終戦記念日
処暑

・歌
浜辺の歌
あした浜辺を　さまよえば
昔のことぞ　忍ばるる
風の音よ　雲のさまよ
寄する波も　貝の色も
ゆうべ浜辺を　もとおれば
昔の人ぞ　忍ばるる
寄する波よ　返す波よ
月の色も　星のかげも
はやちたちまち　波を吹き
赤裳のすそぞ　ぬれもせじ
やみし我は　すべていえて
浜辺の真砂　まなごいまは

９月

・行事-
十五夜(お月見)
重陽の節句
9月　季語-
野分
秋出水
初月
宵月・夕月
長き夜
秋の燈
〔秋の草・千草〕七草〔秋の七草〕
きりぎりす　　くつわむし
　蟷螂（とうろう）
〔かまきり〕初潮。
名月〔明月・望月・満月・十五夜〕
月見〔観月・月の宴・月の客〕
枝豆〔月見豆〕
芋〔里芋・八頭〕
十六夜　　蜻蛉（とんぼ）
鹿の角切
曼珠沙華
彼岸花　鶏頭葉鶏頭
早稲
秋刀魚　　鰯　鮭　鱸

コスモス
草〔月草・ほたる草・ばうし花〕
蕎麦の花糸瓜
唐辛〔唐辛子〕
とうきび
とうもろこし
秋水

・歌-
紅葉
作詞：高野辰之、作曲：岡野貞一
１　秋の夕日に　照る山紅葉（もみじ）
　　濃いも薄いも　数ある中に
　　松をいろどる　楓（かえで）や蔦（つた）は
　　山のふもとの　裾模様（すそもよう）
２　渓（たに）の流れに　散り浮く紅葉
　　波にゆられて　離れて寄って
　　赤や黄色の　色さまざまに
　　水の上にも　織る錦（にしき）

虫の声
あれ松虫が　鳴いている
ちんちろ　ちんちろ　ちんちろりん
あれ鈴虫も　鳴き出した
りんりんりんりん　りいんりん
秋の夜長を　鳴き通す
ああおもしろい　虫のこえ
きりきりきりきり　こおろぎや（きりぎりす）
がちゃがちゃ　がちゃがちゃ　くつわ虫
あとから馬おい　おいついて
ちょんちょんちょんちょん　すいっちょん
秋の夜長を　鳴き通す
ああおもしろい　虫のこえ

瀧廉太郎『月』
光はいつも　かはらぬものを
ことさら秋の　月のかげは
などか人に　ものを思はする
（繰り返し）
あゝなく虫も　おなじこゝろか
（繰り返し）
こゑのかなしき

10 月

☆祭り
神無月なので、お祭りはありません。

☆行事
十三夜　運動会　栗拾い　紅葉狩り　菊人形　秋祭り　ブドウ狩り　寒露

☆歌
１．焼き芋グーチーパー
やきいも　やきいも
おなかが　グー
ほかほか　ほかほか
あちちの　チー
食べたらなくなる　なんにも　パー
それ　やきいも　まとめて
グー　チー　パー

２．紅葉
秋の夕日に照る山紅葉
濃いも薄いも数ある中に
松を彩る楓や蔦は
山のふもとの裾模様
谷の流れに散り浮く紅葉
波に揺られて離れて寄って
赤や黄色の色さまざまに
水の上にも折る錦

3. うさぎ
うさぎ　うさぎ　何見て跳ねる
十五夜　お月様　見て跳ねる

☆花

コスモス　きんもくせい　菊

11 月

11 月（霜月）の行事
霜が降りる頃であることから、「霜月」と呼ばれるようになった

11/3　　文化の日
・ 昭和 21 年日本国憲法が公布された日であり、自由と平和を愛し,文化を薦めることを趣旨とした国民の日

11/6　　秋土用明け
11/7　　立冬（冬の始まり）
11/15
七五三・5 歳の男の子と 3 歳と 7 歳の女の子が無事成長したことを感謝し、将来の幸福と長寿をお祈りするため、神社・氏神に参拝する行事。乳幼児の死亡率が高かった昔にできた。神の子とされる 7 歳までの子どもが社会の一員として認められる歳

11/22
小雪・立冬から数えて 15 日目頃であり、大雪までの期間

11/23
勤労感謝の日・勤労を尊び、生産を祝い、国民が互いに感謝し合う国民の祝日として 1948 年に制定されたもの
終戦前までは新嘗祭（7 世紀頃から天皇が、その年の新穀や新酒を、天照大神をはじめとする天地の神々に供えて感謝し、自らも食す儀式のこと）だったが、終戦後「勤労感謝の日」と改めた。
『日本の行事・歴』http://koyomigyouji.com/11tsuki.html　最終アクセス日 2014 年 11 月 19 日
『11 月の行事』http://11.1003aa.com/　最終アクセス日 2014 年 11 月 19 日

11 月の歌
『まつぼっくり』
作詞： 広田孝夫　作曲：小林つや江
（歌詞）
まつぼっくりがあったとさ
たかいおやまにあったとさ
ころころころころあったとさ
おさるがひろってたべたとさ
『Haiku　楽曲検策』
http://hoick.jp/mdb/detail/12794/%E3%81%BE%E3%81%A4%E3%81%BC%E3%81%A3%E3%81%8F%E3%82%8A
最終アクセス日 2014 年 11 月 25 日

『たき火』
作詞作曲
（歌詞）
かきねのかきねのかきのたね
たきびだ　たきびだ　おちばたき
あたろうか　あたろうよ
きたかぜぴいぷう　ふいている
さざんかさざんか　さいたみち
たきびだ　たきびだ　おちばたき
あたろうか　あたろうよ
しもやけおててが　もうかゆい
こがらしこがらし　さむいみち
たきびだ　たきびだ　おちばたき
あたろうか　あたろうよ
そうだんしながら　あるいてる

『童謡　唱歌　たき火　歌詞』http://j-lyric.net/artist/a00126c/l013290.html

12 月の行事

≪大晦日≫・・・旧暦では毎月の最終日を晦日（みそか）といった。晦日のうち、年内で最後の晦日、つまり 12 月（または閏 12 月）の晦日を大晦日といった。元々“みそ”は“三十”であり、“みそか”は 30 日の意味だった。

≪年越しそば≫・・・江戸時代には定着した日本の風習であり、蕎麦は他の麺類よりも切れやすいことから「今年一年の災厄を断ち切る」という意味で、大晦日の晩の年越し前に食べる蕎麦である。

≪年賀状≫・・・新年に送られる郵便葉書やカードを用いたあいさつ状のことである。新年を祝う言葉をもってあいさつし、旧年中の厚誼の感謝と新しい年に変わらぬ厚情を依願する気持ちを、親しい相手への場合などには近況を添えることがある。

≪12 月の歌≫

≪たき火≫・・・作詞は巽聖歌、作曲は渡辺茂。渡辺は、巽の手掛けた詞について「ほのぼのとした暖かい気持ちになり「うた心、こども心」を捉えた詞だといっている。印象に残る「ぴいぷう」の単語は、北国の出身の巽だからこそ考えついたものだ。
歌詞は、『かきねの　かきねの　まがりかど　たきびだ　たきびだ　おちばたき「あたろうか」「あたろうよ」きたかぜ　ぴいぷう　ふいている　さざんか　さざんか　さいたみ　たきびだ　たきびだ　おちばたき　「あたろうか」「あたろうよ」しもやけ　おててが　もうかゆい　こがらし　こがらし　さむいみち　たきびだ　たきびだ　おちばたき「あたろうか」「あたろうよ」そうだん　しながら　あるいてく』

≪お正月≫・・・作詞は東くめ、作曲は瀧廉太郎。子どもたちが正月の到来を待ち望む内容の歌である。歌詞の 1 番には凧とこまが登場し、男の子向けの歌詞になっいる。歌詞の 2 番にはまりとおいばねが登場し、女の子向けの歌詞になっている。歌詞は、『もういくつ　ねると　お正月　お正月には　凧あげてこまをまわして　遊びましょう　はやく　こいこい　お正月　もういくつ　ねるとお正月　お正月には　まりついて　おいばねついて　遊びましょう　はやく　こいこい　お正月』

≪雪≫・・・作詞家作曲者不明。「こんこ」の正確な意味・語源は不明で諸説あるが、「来む」（来い = 降れ）と関係がある言葉と思われている。歌詞は『雪やこんこん 霰やこんこん。降つては降つては ずんずん積る。山も野原も 綿帽子かぶり、枯木残らず 花が咲く。雪やこんこん 霰やこんこん。降つても降つても まだ降りやまぬ。犬は喜び 庭駈けまはる　猫はこたつで丸くなる

活動報告

平成２７年２月２７日～３月９日までの１１日間の研修中に感じたことを受講学生がまとめました。

DONG BA 市場とアオダイオーダーについて：

日本文化学科１年　Tran Thi Tam

　ベトナムでの初めてのアクティビティは市場へ行き見学することでした。日本ではスーパーマーケットなど多いですが、ドンバ市場のような市場は多分ないと思います。そのため皆さん、誰もワクワクしていました。最初に移動した場所は市場の中にある店でアオダイをオーダーすることでした。

　市場に入る瞬間すごいの匂いを感じました。これは海鮮の匂いと新服の匂いと混ざった感じがしました。ベトナム伝統的な服装は「アオダイ」という服です。買いたいと思ったらすぐ買えるものではありませんが、 1人1人ずつのサイズで作るものです。これはアオダイの特徴であり、過言ではないと思います。好きな色や好きなデザインを選んでアオダイを作りました。 アオダイの採寸が終わってから、市場の周りを見学しました。いろいろな生き物（魚、貝類、エビカニ類、鳥肉や豚肉）やいろいろな野菜や果物がありました。日本ではないものもいっぱいあります。日本ではあり得ないことですが、ベトナムでは普通です。肉や魚など温度の高いところで売られており、冷蔵などで保存して販売されていないのがベトナムです。しかし、ベトナムでは肉や魚などは、一日中、保冷しないで使います。これは日本とベトナムの大きな違いだと思います。

山岳少数民族との交流について：

国際コミュニケーション学科1年　村田莉菜

3月1日、ベトナム研修3日目に私達は少数民族の村を訪れました。ホテルからバスで1時間半ほどの山の中にあるカトゥ族の村です。ベトナムは54の民族から成り立っており、その8割はベト族です。今回の研修でお世話になったソンさんやリーさんもベト族です。残りの2割は少数民族ということになります。ベトナム政府はこれらの少数民族と外国人の交流を禁止しています。その理由は外国人との交流の影響で少数民族が暴動を起こす可能性があるからです。今回、私達が少数民族との交流が出来たのは二つの理由があります。一つ目はベトナム最大の水害が起こった時にJASが支援をしたことです。二つ目はJICAがナムドンの村の子どもたちの病気の検査をしたり、奨学金を与えたりしたことです。これらの日本の機関の支援を信頼して、今回の少数民族との交流の場が生まれたと言う事を聞いて、今までのJASやJICAの支援に感謝の気持ちを持ちました。

上記にもある通り、ベトナムは主にベト族から成る多民族国家です。日本は単一民族国家だと考える人も多いですが、アイヌ民族や琉球民族も含む多民族国家です。この日本のアイヌ民族や琉球民族とベトナムの少数民族は共通している点が多く見られます。日本では奈良時代の征夷大将軍というアイヌ民族を支配しようとする動きから見られる通り、古くからアイヌ民族や琉球民族を制圧しようとする考えがありました。この考えは土人保護法という法律が7.8年前まで残っていたことからも最近まで日本に根強く残っていたと考えられます。また現在のベトナムも同様です。日本などの先進国が学校を作るなどの支援をすると、ベトナム政府が学校にベト族の先生を派遣し、ベトナム語やベト族の歴史を教えます。こうすることで国家の同化政策を行っているのです。学校を作ることは決して悪いことではありませんが、少数民族の文化が消滅してしまいます。少数民族それぞれのアイデンティティーを守り、文化の掘り起こしを行うことが重要になるのです。

今回訪れた村は160世帯670人が生活をしていました。昔は現在よりも山奥に住んでおり、1975年に現在の村に移り住んだそうです。山奥に住んでいた頃は塩もなく、厳しい生活をしていたそうですが、現在は政府と共産党のおかげでベトナム語が分かるようになり、子どもたちは学校に通うことができて仕事も順調だそうです。

小山さんの話では政府や共産党の同化政策は少数民族の文化の消滅を促すものだと聞きましたが、少数民族の村長さんはベトナム語が分かるようになり生活が豊かになったとお話ししていまし

た。どちらの意見も正しいものだと思います。この研修で品川先生が何度もおっしゃっていた「物事を一つの意見で決めつけるのは良いことではない」という意味がここにあると思います。自分の価値観や自分の周りの意見で物事の良し悪しを決めることのないようにしたいと思います。

少数民族との交流では踊りを披露して頂いたり、お酒や民族料理をご馳走になりました。言葉が通じない中でもジェスチャーや本の活用で工夫してコミュニケーションが取れたと思います。少数民族との交流の中で私は一人の少女と出会いました。11歳のベンちゃんという可愛らしい女の子です。ベンちゃんとは日本語とベトナム語が書いてある本をお互いに指差しながらコミュニケーションをとりました。彼女とのやり取りの中で気付いたことは、ベトナム人は日本人よりもアイコンタクトを取ることです。最初は恥ずかしがっていたベンちゃんも初めから私の目をずっと見ていました。日本人は恥ずかしい時や自分の立場が悪い時は相手から目をそらしますが、初対面で言葉が通じない歳上の相手である私にもしっかり目を見て対応してくれたことに驚きを感じたと共に私も見習わなくてはならないなと思いました。

少数民族との交流は支援物資を渡すということもしましたが、それよりも私達が多くの体験と経験を得られた非常に有意義な時間でした。

ティエンムー寺院と王宮について：

国際コミュニケーション学科１年　石丸　真有

私たちは3月2日にティエンムー寺と、王宮を訪問しました。

ティエンムー寺の名前の由来は空から来たおばあさんという意味だそうです。おばあさんが空からのお告げを聞いてここに寺を建てると良いことがある、ということでお寺を建てたそうです。1601年に建てられて、フエの中で一番有名できれいなお寺です。お坊さんはお給料が良いらしく、お坊さんになりたいと思っている人がたくさんいるそうです。また、ティエンムー寺は反政府運動の拠点地でもあり、警察も注視している場所のようです。

お寺はとてもきれいで、しっかりしていました。ティエンムー寺の中に入っていくとお参りをする場所がありました。神様の像が３つあります。1番左の像は過去、真ん中の像は現在、右の像は未来を意味しています。参拝したい像の前で参拝します。

ティエンムー寺はフエの中でも観光スポットで、多くの外国人がいました。

ティエンムー寺のあとに王宮を訪問しました。王宮は10年くらい前までは子どもの遊び場のようになっていたが、ユネスコに登録されてから、政府が王宮の支援をして、改装しきれいに修復されました。また、今でもまだ改装が続いている場所もあります。中には代々の天皇の写真が置いてあり、金の飾りなどがついていて、とてもきれいにされていました。

ティエンムー寺と王宮を訪問し、説明を聞き、ベトナムの歴史を身をもって感じることができました。まだ、わからないことが多いので勉強しようと思いました。日本の寺や観光地と比べると、ベトナムは敷地が広く、回るのも大変でした。

ベトナム戦争体験者（ニエン氏）の講話と質疑応答について：
国際コミュニケーション学科１年　浜崎友里

私たちは3月2日の午前にティエンムー寺や王宮などベトナムの歴史を肌で感じた後、ベトナム戦争の苦境を乗り越えて生きたニエンさんにお会いした。彼は優しい笑顔で私たちを迎えてくださり丁寧に話しをしてくださった。彼の話しを聞いて印象的だった点が2つある。

一つ目はベトナム戦争の非道さに日本の学生が立ち上がり戦争反対を訴えていた点である。今では支援団体などが主に活動をしている印象があるが、私たちと同じくらいの世代が意欲的に他国の戦争に介入していたことに驚いた。ただの学生だが少なからず影響を与えていたことは事実であり、世界に発信するのに社会的な身分は関係ないと思った。

ニつ目は敵国だったアメリカを今では尊敬していると思う点である。文明や技術面でベトナムに貢献してくれたからである。反対に中国との政治的な対立に応援してほしいと思っている。枯れ葉剤など自然、人にひどく影響を与えたアメリカに対して今ではサポートしてほしいという感情を持てるのに彼らの柔軟性が伝わった。

彼の話しを聞いて今ではベトナム戦後40年近くなり戦争を経験した人が高齢者となっており、今の政治を動かしている世代ではないので日本と同じような状況に置かれていると思った。過去のお互いの国の過ちを受け入れ腐敗させることはせず、未来に残していき、良い関係を築けるよう努力するべきだと思った。

JASS代表　小山　道夫氏の講演を聴いて：
国際コミュニケーション学科１年　根本　亜香里

小山さんの子どもの家のお話を聞きました。

はじめのベトナムのストリートチルドレンの映像では、小山さんが子どもたちを子どもの家に誘うというもので子どもたちが困っているのに素直に助けてと言わないのか疑問に思いました。しかし、小山さんのお話を聞き、ストリートチルドレンになる原因を知り、大人に対して不信感を抱いているのではないかと考えました。それに対して、小山さんは、無理やり連れて来させようとはせず、子どもたちの気持ちを大切にしていることを感じました。

次に、小山さんの活動をしていくにあたって、ベトナム社会に貢献しようという考えではなく、あくまでも、たった1人の人生を変えよう、という考え方がとても心に残りました。同時に、自分にできることはないのか考えさせられました。また、小山さんが子どもの家を作り上げてることが出来たことに対して、自分には、この程度しかないと決めつけないことや人との繋がりを大切にすることを学ばせていただきました。これらのことを忘れず、いろんなことに挑戦して行きたいと強く思いました。

また、小山さんの歩まれた人生についてのお話では、過酷で、自由に選択することの出来ない時代だと思いました。自由に選択が出来る時代に生まれてきたことを感謝すべきと考えさせられました。私は、自由に選択が出来き、自分自身のために生きていける時代だからこそ、他者のために何か出来ることをするべきではないかと考えました。

さらに、小山さんのお話を聞くことが出来、とても考えされた良い機会となりました。お話を聞き、真剣さが随所に感じました。誠意を持って接すれば相手にも伝わるという言葉を聞き、私たちも誠意を持ってお話をしてくださっていると理解しました。このことを聞き、今まで、しっかり誠意を持って接していたか、自問自答しました。また、誠意は伝わることを改めて知ることができました。これから、全てのことに対して誠意を持って人や物事に接して行きたいと思いました。

子どもの家の訪問について～食と命の授業：

日本文化学科1年　佐藤 由理

私達は研修5日目である3月3日に、子どもの家を訪れた。

子どもの家は1994年に日本の友人や支援団体から支援を受け小山道夫さんにより建てられた。また同時に、JASS(子どもの家を支える会)という団体も設立された。

小山さんは1993年からストリートチルドレンを助ける活動をしている。現在では、ストリートチルドレンは少なく、家庭の事情で親元を離れた子ども達がいるという。子どもの家では、子ども達は二段ベッドで一部屋約8人に別れて生活している。ベトナムの学校は午前と午後の部に別れているので、子ども達はそれぞれ学校に行き、空いている時間に宿題をしたり、当番制で食事作りをしたりの手伝いをしている。

私達は今回、ここで食事作りの手伝いをした。特に、食と命の授業である。鳥を締めたことは貴重な体験であった。私達は三人一組に別れて、一羽の鳥を締めた。鳥の羽を踏んで、顔を抑え、首を包丁で切り血抜きをした。その後に、お湯をかけてから羽を毟る作業をした。

私は、鳥を締めているところを見た経験があったので、できるかもしれないと思っていたが、鳥に触った瞬間生き物のあたたかさを感じて、手を離してしまい、自分にはできないことだと思ってしまった。

しかし、最後はグループの皆のおかげで無事鳥を締めることができた。

首は他の子に抑えてもらい、私は包丁を握ることと、羽を足で抑えるという仕事をした。自分の包丁で鳥を締めなくてはいけないという責任の重さを感じ、躊躇してしまったが、鳥の覚悟を決めた顔を思い出し、私も覚悟を決めて包丁を引いた。

普段、日本に住む私はスーパーなどで鳥が肉片になった姿しか見ないため、生きている鳥の姿を想像してお肉を食べることは少ないが、今回この体験をしたので、レストランなどで鶏肉を見ると鳥を締めたことを思い出してしまう。また、それとともに顔も知らない誰かが鳥を締めてくれているんだとも思い、感謝の気持ちも忘れないようにしたいと思った。

ところで発展途上国では、自給自足をしている村などがたくさんある。自給自足であれば鳥を締めることは自分達が生きるために必要なことである。しかし、開発が進み都会化すればする程、自給自足をする必要はなくなり、生き物が食べ物になる過程は見えなくなってしまう。先進国である日本の子どもは、鶏肉が鶏の肉であるということがわからない子どもがいるという、また鶏の絵が描けない子どももいるという。

私はこの研修を通して、今まで自分の知らなかった食べ物をたくさん食べた。知らない食べ物の名前や、よくわからない草の名前、食べ物の原料や調理方法などをガイドさんなどに聞いて教えてもらった。自分の食べているものがどのようなものなのか、どういう風に調理されているのかを知ってから食べるということは楽しくて、より一層美味しく感じるものだと思う。食べ物がどのように自分の元に届くのかという過程を知ることはご飯を楽しくおいしく食べるために大事であると思う。

子どもの家では、子ども達は締められた鳥も、丸焼きにされている豚も日頃から見ていて、料理のお手伝いもしている。子どもの家のこどもはきっと楽しく、幸せにご飯を食べているのだろうと思った。

子どもの家について～環境教育の授業：

日本文化学科３年　吉田　早希

子どもたちとの交流前に小山先生が「子どもの家の子たちは泣いている子なんていないよ。みんな笑顔だよ」と、おっしゃっていました。〝孤児〟と聞くと日本ではかわいそう、と思われがちです。メディアでそのイメージがつくような誤った報道をしているからです。でも実際にはそんなことを全く感じませんでした。目が合ったら微笑んでくれる、鶏の屠畜を怖がっていたら手を握ってくれる、お茶碗が空いたらごはんをよそってくれる、心の優しい子たちばかりです。また、後ろからつついてきたり、抱きついてきたり、人懐っこい一面もあります。私は、海がめのワークを日本・ベトナム両方で行いましたが、子どもの家の子どもたちは日本の子どもたちと同じか、むしろより活発に行動していたように思います。障害物に突進してくるわ、生き残っているとウソをつくわ、元気すぎて苦戦するほどでした。しかしそれだけワークに対して積極的で、本気で取り組んでくれていたのだと思います。みんな本当に良い笑顔に良い反応。とてもやりがいがあったし、子どもたちにも伝わったでしょう。どの子も本当に楽しそうで、一緒にいる私たちもとても楽しく過ごせました。

子どもたちと、ふれあって特に思ったのは言葉は通じなくてもわかり合えるということです。お互いに相手国の言葉はほとんど話せない状態でしたが、表情やジェスチャーだけでもちゃんとコミュニケーションがとれます。そしてその交流がとても楽しかったこと。一緒に撮った写真を見返しても楽しい様子が思い出されます。子どもたちと過ごせた時間は本当にとてもいい思い出になりました。またいつか彼らに会いたいです。

子どもの家について～味わい教育の授業：

日本文化学科１年　菅原 菜美

ウミガメの物語

子ウミガメが大人のウミガメになるまでの過程では様々な困難があり、大人のウミガメになるまでに生き残ることができるのは 1000 匹に 1 匹である。そしてこの困難を引き起こしているのは人間であるという事実を知ってもらい、どのようにすればウミガメたちが生きやすくなるのか考えてもらう。まず、紙芝居で物語の概要を説明した後、「浜から海に入るときに波に飲まれてしまう」、「漁師の網に引っかかってしまう」、「クラゲと間違えてビニール袋を食べてしまう」、「餌と間違えて毒を食べてしまう」という 4 つの試練を課し、学習院女子大の学生とベトナムの学生全員参加型の劇を行った。

クリップと洗剤を使ったアクティビティ

水に浮かぶ生き物にどんなものがあるかベトナムの学生に問いかけ、いくつか例を挙げたうえでゲームを行う。水をコップの縁ギリギリまで入れ、水の表面にクリップを浮かべたものに洗剤を数滴垂らすと浮かんでいたクリップが全て底に沈む。このクリップを水に浮かぶ生き物に見立て、洗剤が海や川に流れ込めばこの生き物たちは生きられないということを理解してもらい、どのようにしたらよいのかを考えてもらう。

味わいのアクティビティ

・食べるときに使う部分、五感とは何か

私たちが食べるという行為をするとき、食べるものを目で見て、手で触感を感じ、耳で音を感じ、唇や舌で質感を感じ、歯で食感を感じるなど、口以外にも様々な体の部分を使っている。ここでは食べるときに使う体の部分は何があるかベトナムの学生に問いかけ、意見を出してもらうことで食べるときには口だけでなく様々な部分を使っているということを意識してもらう。

・視覚と嗅覚を遮断し、味覚だけを使う

ものを食べるときには舌で感じる味覚だけで味を決めているだけでなく嗅覚も重要な役割を果たしているということを体験してもらうことが狙いであり、これに関するふたつのアクティビティを行った。

一つめはジュースが何味か当てるアクティビティである。二つめは、何のナッツか当てるアクティビティである。ハスの実とアーモンドを砕いたものを、どちらもそれぞれ目隠しをして鼻をつまんだ状態で味覚だけを使って食べてもらい、それぞれ食べたものが何だったのか当ててもらう。このとき、味を答えるまでは鼻をつまんで目隠しをしたままにしなければならない。

鼻をつまんだままで何の味か答えるのは難しかったようだが、やはり匂いが鼻からぬけると圧倒的に正答率が上がるようだった。今回のアクティビティではクイズ形式にしていたが、味を当てることに集中してすぐに鼻をつまむのをやめてしまう人が多かったため、あえてクイズ形式にしなくてもよいのではないかと感じた。

・味覚テスト

甘味、塩味、酸味、苦味、旨味の五味についてそれぞれの味を再認識してもらい、無味（水）を含む味覚テストを行った。まずは五味がそれぞれ入った A〜E のカップを配り、それぞれ飲んで味

を答えてもらう。これの答え合わせをしたあと、次に五味と無味（水）がそれぞれ入った A～H までのカップを配り、それぞれ飲んで味を答えてもらう。無味（水）は 8 個中、3 個含む。どちらの味覚テストも飲むときは 10 秒間口に含み味わってから答えること、一度答えたら書き直してはいけないことが注意点である。

結果としては、ベトナムの学生の方が学習院女子大の学生より圧倒的に正答率が高く全問正解者も多かった。酸味と無味については少し感じづらいようだったが、無味については今回は人数の関係上、口直し用の水を用意できなかったため難しかったのかもしれない。またフエはホーチミンなどの南部に比べ料理の味付けが薄く、南部へ行くほど味が濃くなるため他の地域でやればまた違った結果となるかもしれない。

フエ高等師範大学 日本語学科との交流について：

国際コミュニケーション学科１年　古谷 理恵

6日目のこの日は、午前と午後に分けてフエ高等師範大学の日本語学科の学生と交流をさせてもらった。午前は3年生の学生との交流。教室には、15人という予想を超えて37人の学生が集まってくれた。女子が圧倒的多数で、男子は1人しかいなかった。教室には、黒板、長机があり、日本の教室と変わらない風景である。私が年齢を質問したベトナムの学生は20～23歳。携帯やスマートフォンを持ち、これまた日本と変わらない。

会話を通して感じた1つ目は、簡単な会話であれば学生は日本語で話せることである。日本語をどういうふうに習得しているのか気になったので教科書を見せてもらうと、日本語の文法がほとんどで、肯定・否定の接続詞や並べ替え問題などが書かれてあった。漢字の学習は無いようだ。感じたことの2つ目は、積極的に話しかけてくれることだ。隣に座った学生の方は、多くの質問をしてくれた。時々会話で意味が通じないとカタカナで文字を書いたり、ジェスチャーで伝え合ったりすることが出来た。

午前中、3年生へのアクティビティは1. イラストを使って味覚や五感・五官を考える、2. ジュースを、鼻をつまんで味わうこと、3. ８種のカップに入れた味を探求する味覚の授業であった。中でも、我が大学との比較調査である3の結果は、高等師範大学の学生の方が味覚のチェックの全問正

解者が多かった。ベトナムではうまみが分かりにくいと日本での事前研修の際に考えていたが、結果を見ると、うまみを感知出来た学生は多かった。

午後は2年生との交流であった。午前と同数に近い26人が集まってくれたが、またもや男子の人数は少なく、2人であった。年齢を聞いた学生は全員20歳と答えていた。3年生よりは日本語の会話がたどたどしかったが、積極性は変わらず多くの質問をしてくれた。

午後に行ったアクティビティは、1.ナッツを、鼻をつまんで考える、2.クリップを水に浮かべ環境を考える、3.海がめの物語と体験である。1は、正解を出していた学生が何人もいた。2は、日本では出なかった、へびなどの水の上に浮かぶ生き物を答えてくれていた。日本では一般的なアメンボーなどの昆虫は挙がらなかった。3の体験では、海がめが食べたら死んでしまうビニール袋を見立てたチョコボールの試練で、何を見立てているか分かるかという質問にはなかなか答えが分からず、ヒントを出したので、もう少し分かりやすい例えにすれば良かったかもしれない。しかし、大人の海がめになる為の試練を学生ほとんどが楽しんでくれていたようだ。

フエ高等師範大学の学生は、みんな積極的に日本語で会話をしようと試みてくれたり、黒板に書いた日本語を自分のノートに写していたりと勉強熱心な一面が垣間見えた。アクティビティでは、結果は予期しないものであったり、楽しんでくれたりと成功したと思う。

こちら側では、アクティビティがうまくいき比較が出来たことが収穫でもある。しかし、それだけにとどまらず、この交流を通して日本に興味を持って欲しいし、私たちも日本の良さを広められるようにすれば良いのではないだろうか、と感じた。その為にも現地の大学に訪問し、実際の日本語教育の現場を見られたことは大きな成果と思った。

障害児リハビリテーションセンター平和村を訪ねて：
国際コミュニケーション学科１年　雲田 理愛

私は3/5に訪れた障害児リハビリセンターについてレポートします。

平和村のリハビリテーションセンターでは、1～6歳までの未就学の子ども達がリハビリをしています。母親と一緒に入院できる部屋もあり、さらに価格も食事以外無料と福祉が充実しています。また、施設には沢山のおもちゃがあり、私達が訪れた時には、それを使って保護者の方と一緒に子どもと交流しました。音のするおもちゃに興味を持つ子、箱にピースをはめるおもちゃに熱中する子、おもちゃではなく空き箱の方に興味を示す子どもなど、反応は様々でした。しかし、どの子ども達も好奇心旺盛であるという点は共通しているようでした。

さて、ベトナムには多くの障害児がいます。実際に現地でお話を聞いたところ、厳しいベトナムの実態を知ることができました。

大きく２つあります。まず、1つめは、環境です。退院した障害児のほとんどが8～12歳の間に亡くなってしまうのだそうです。それはアフターケアが行き届かないからです。具体的には、母親がリハビリの仕方を十分に理解しておらず、間違ったリハビリをしてしまうことがあげられます。地方に戻っても近くに病院があり、月に1回ほど医師が診察できる環境が理想的だそうですが、経済的にそれをこの施設で行うのは困難なようです。２つめは手術費用を捻出することが困難なことで

す。ベトナムの月収が5000円である家庭があるにも関わらず、手術費用は200万円です。さらにベトナムでは手術を行える病院が少なく、フエの近くには病院がなく、病院に行くこと自体が難しいです。さらに、もし行けたとしても、手術待ちの患者が多いため、すぐ手術はできません。一方、改善されつつある事もあります。それはベトナムで障害を持つ子どもに関心が向くようになったということです。現地に住み続けている小山さんは、20年前は放置だったが、10年間の活動を通して、だいぶ世間の目が向くようになったと話します。しかし、障害児が生まれるのは母親のせいだという風評もいまだ残っています。障害に関する正しい知識、正しい治療法をこれからも広めていくことが必要となるでしょう。

続いて、ベトナムで障害児が生まれるのを減らすにどんな支援が必要かを２つ、小山さんのお話を元に考えました。1つめは母親への支援です。具体的には３つあります。

まず、正しい医療への知識を持ってもらうことです。障害児が生まれる原因として、母親が妊娠時に間違った薬の飲み方をしていることがあげられます。自分で判断するのではなく、医師の言う通りに正しく薬を飲む必要があることを知ってもらわなくてはなりません。次に、同じく妊娠時に母親に栄養を取ってもらうことです。栄養失調の状態で子どもを産むと、子どもが障害を持ってしまう可能性が高まるからです。最後に、高齢出産のリスクを知ってもらうことです。女性は年齢を重ねるごとに、元気な子どもを産むのが難しくなるからです。２つめは環境の支援です。ベトナムでは戦争時にアメリカにまかれた枯葉剤がいまだ残っています。また、汚染された水からウイルスを持った蚊が発生し、そこから病気に繋がることも多々あります。そのため、汚染された環境を改善する必要があるのです。先ほどあげた２つの原因は、どちらも経済的な貧しさに起因しています。日本など経済的に豊かな国が金銭的支援も行えるのが理想かもしれません。また金銭だけでなく、母親に支援をする人材や綺麗な環境作りのための物資なども必要であると私は考えます。

フールー小学校での交流について：

国際コミュニケーション学科３年　世良　新菜

フール―小学校を訪れた際に、近くに大きな河があるという印象を受けた。その後、フール―小学校は元々船上生活者の子供たちが通っている学校であるという説明を聞いて納得した。学校が設立した当初は、十分に学校へ行くお金がない子供は奨学金や支援物資を受けて通っていたという。

どのような子供たちが学校にいるのだろうと感じたが、会った瞬間どの子供も元気で明るいという印象だった。交流として、私の担当とするウミガメのアクティビティを行った。

このアクティビティは子どもの家やフエ高等師範大学でも行ったのだが、比較してみると私たちの問いかけに対して一番反応が早かったのが、このフールー小学校であったと思う。何人かの子供が手を挙げるのではなく、驚いたことにほぼクラスの全員がすぐ手を挙げたときは感動した。また、指示したことに対してもしっかり聞き、楽しむ部分は楽しみ、真面目にならなければならないところは真剣に聞いてくれたので、行う側は大変嬉しかった。

今回クラスを担当した子供たちは、日本でいう小学六年生にあたると先生から聞いた。はたして、日本で同じことを行ったら全ての子供たちが恥ずかしがらずに手を挙げるのだろうかと感じる。日本ではどうしても間違った答えだったらどうしようという気持ちから手を挙げない子供が多いイメージがある。今後、日本でも同じアクティビティを行う機会があれば、日本とベトナムの教育面から見た比較ができると思った。

フールー小学校での交流は限られた時間であったが、その時間内の中でも子供たちの特徴をわかったのだから、もっとベトナムの子供たちのことを深く知りたい。素直な気持ちを忘れずに、常に笑顔で明るい子供たちに出会えてよかった。

戦争証跡博物館について：

日本文化学科３年　南　菜津香

今回ホーチミン市内にある戦争博物館へ行き、歴史の時に学んだベトナム戦争の内容を上回るような現実を見ることができました。ベトナム戦争は21年間という長い期間戦いをし、そしてその戦争で大勢の人々が命を落としました。その戦争の真相が博物館には全て表現されており、とても胸が苦しかったです。

また、博物館にはホルマリン漬けされた奇形児が展示されており、頭がつながってる2人の胎児や足がない人の写真がありました。このような戦争でたくさんの人々が苦しみ、現在でもたくさんの人が被害にあっています。今だに後遺症が残っている人々もたくさんいます。戦争がもしなかったら、このように後遺症が残ることもなかったですし、被害者や死者を出すこともありません。しかし、ベトナム人はとても心の面や頭の良さはアメリカ兵よりもいいと思いました。理由として、ベトナム人側が使う銃より良いものは使わなかったが、知恵と能力を使い、いろいろな工作を練って、戦いに挑んでいました。そのようなところにベトナム人の強さを感じました。

写真にはたくさんの戦争の傷跡が残っていた。それをみて、戦争は決してやってはいけないものだと思いました。戦争は失うものがたくさんあると思います。

クチトンネルについて：

国際コミュニケーション学科1年　藤本そのこ

クチは穏やかな農村だったが共産党ゲリラの作戦本部だったので、アメリカからずっと見張られていた。クチゲリラは藪の中に隠れる事を知っていたアメリカは大量の枯葉剤を撒き、藪を燃やした。家畜をあらしたり、仏像、鉄製品を破壊していった。それでもクチ村の人々は一致団結し、クチに留まることを決めた。

地上で住めなくなるとクチの人々は地下に住んだ。それがクチトンネルである。このトンネルは訪仏戦争の時からすでに掘られていたが、その当時は45キロメールしかなかった。しかしアメリカとの戦争が始まってから24年間かけて全長250キロメートルになった。トンネルを掘る作業は全て手作業で行った。掘った土でできた山は地雷を使ってばらした。クチトンネルは地下3階まであり、地下1階は3メートル、地下2階は6メートル、地下3階は10メートルまで掘られた。地下10メートルまで行くと酸欠状態になるが、アメリカのＢ52が落とす爆弾はそこまで届かないので、防空壕として使われた。

クチの人々はトンネルで21年間生活をした。トンネルの中には、学校、食堂、調理室、井戸、武器を作るところ、武器を補完するところなど様々な場所があった。火をつけた時に出る煙は、そのままでは地上に登って敵に居場所を知られてしまうのだが、クチの人々は地下煙突を作ることができたので、その煙突のおかげで煙は酸化され地上に登らなくなるので、安心して生活することができた。酸欠を防ぐために空気穴が作られたが、アメリカ兵が犬を利用して空気穴から漏れてくる人の匂いを探させた。クチの人々はその対策として、戦死したアメリカ兵の所持品を空気穴の所に置いた。アメリカ兵の所持品の匂いが人の匂いよりも強かったので、犬はわからなくなってしまうからだ。トンネルの入り口は、大柄なアメリカ兵が入れないように非常に小さく作られた。入り口は蓋をして上から土を被せればなかなか見分けがつかない。もしアメリカ兵が見つけて開けても、蓋の裏に手榴弾を仕掛けたり、中にはもっと大きな地雷を仕掛けて入り口ごと壊すようになっていた。この入り口に実際に入ってみたが、とても小さかった。体験した入り口は実際よりも少し大きくなっているということだったので、本物は相当小さかったのだと思う。

トンネルも実際に体験することができた。中は酸素が薄くて暗くて狭かった。ずっと腰を屈めて進まなければならないし、一番狭い所では四つん這いにならなければ通ることができなかった。し

かしこのトンネルも実際より少し大きく掘ってあるということだったので、この中で21年間も生活していた人々の相当の根性と忍耐力に驚いた。この狭い空間では自由に動くことが難しかったと思うし、通る方向をしっかり決めていなければならなかったのだから素晴らしいシステムだと思う。またクチの人々の戦術も素晴らしい。クチゲリラの武器はアメリカと比べるとずっと劣っているし、不足している。服装もアメリカ兵が鉄兜や長靴なのに対し、クチゲリラたちは普通の布でできた帽子に横浜タイヤで作ったサンダルだった。クチのゲリラはアメリカと正面衝突をすれば敗北は間違いないので、様々な工夫を凝らしていた。

クチゲリラは様々な場所に落とし穴を作った。元々は昔、動物を仕掛けるための物だったが、武器とて使った。穴の底には硬い竹槍がたくさんあり、落ちたアメリカ兵は串刺しになってしまう。もしそれで命を落とさなくても、竹槍の先には毒が塗ってあるのでいずれ亡くなってしまう。
他にも井戸罠、脇罠、回転罠、扉罠、挟み罠などがあった。携帯用の罠もありその場ですぐ仕掛けることができた。またクチゲリラはトンネルを上手く利用し、時には敵の後ろ、時には敵の前と様々方向から突然飛び出して攻撃した。それは「ベトコンゲリラはどこにもいないがどこにでもいる」と表現された。クチゲリラはたとえアメリカ兵の優れた武器が手に入ってもそれは使わず、昔からの戦法をやり通した。クチの人民は食料が不足すれば戦力が落ちるということを理解していたので、たとえ襲撃されてもクチゲリラの為に食料を生産し続けた。人々は武器を所持し、襲われたら自ら攻撃した。昼は戦い、夜は畑を耕した。ゲリラたちがおやつとして食べていたというキャッサバを蒸したものと、お茶を実際に頂いた。どちらもほんのりと甘くて、お腹にたまり力の湧いてきそうなものだった。

ベトナム戦争は1954年から1975年までの約21年間続いた。そのうちで一番激しかったのは1962年から1972年までの10年間だった。アメリカはクチを死んだ村にしようとしたが、クチは決して滅亡しなかった。1972年にアメリカの国防長官がクチを視察し、クチがどれだけ優れているかを理解し、アメリカが勝利するのは不可能だろうと発表した。アメリカはベトナム共産党と会議をし、ベトナム共産党が降伏しなければベトナムを石器時代まで戻すと脅した。ベトナム共産党はロシアと中国に相談し、ロシアが開発したミサイルを支援してもらった。それによってアメリカの戦車を破壊するなど有利にたった。そしてアメリカは敗北した。1975年4月30日11時30分、ベトナムは陥落した。しかしそれはベトナムの解放を意味した。

ベトナム戦争の被害は大きかった。ベトナム人の死者は300万人と言われているがその中のほとんどは無抵抗な人民であった。アメリカが撒いた枯葉剤による後遺症は重く、今でも苦しんでいる人がたくさんいる。枯葉剤による奇形児はおよそ5万人と推定される。大量に枯葉剤が撒かれた所では現在でも回復していない。アメリカはベトナム戦争で1400万個に及ぶ爆弾を使用した。そのため、ベトナムの特に中部には今もたくさんの不発弾が残っている。これだけ激しい戦争だったのにクチが滅亡しなかったのは、クチの人々の自由を守りたいという思いが相当強かったからだ。決して死を恐れず戦い続けたクチの人々の精神力の強さを思い知った。そしてクチトンネルの精密さと複雑さに感心した。クチの人々の団結力と精神力は素晴らしいと思うが、このような悲惨な戦争が二度と起きて欲しくないし、起こしてはいけないと強く感じた。

食と命の授業

ベトナムの風土と食を通して感じたこと

フエやホーチミンで体験したベトナムの食生活を通して、
感じたことを受講学生が一人一人まとめました。

国際コミュニケーション学科1年　村田　莉菜

食と命の授業

鳥を絞める食と命の授業は私にとってとても印象に残るものになりました。日本で見るニワトリと違って、とても大人しく自分の死を悟っているようでした。残念ながらニワトリを絞めることに対して抵抗があり、あまり活動には参加出来ませんでしたが、私達が普段口にしているニワトリを始めとする動物たちはあんなふうに殺されていることを知り、とても考えさせられました。日本には「いただきます」と「ごちそうさまでした」という言葉があります。この言葉を今までよりも気持ちを込めて言うようになりました。衝撃的な体験であるとともにとても良い経験になりました。

ベトナムの食について

ベトナムには本当に様々な食があり、どれもとても美味しかったです。その中でも一番印象に残っているのはヤギの焼肉とヤギ鍋です。ヤギの焼肉ではヤギのおっぱいと赤みが出ました。私はヤギを食べるのが初めてでドキドキしながら食べましたが、臭みがなく独特の食感でとても美味しかったです。

ヤギ鍋はヤギの脳を食べるということがとても印象的でした。実際の味は白子に似ていてとても食べやすかったです。

ヤギの焼肉やヤギ鍋を食べているときのタムさんとの会話がとても印象に残っています。ベトナムでは犬や猫を食用の動物としているということに驚きました。日本では犬や猫はペットとして飼い主は家族のように接しています。ベトナムではそのような愛情を持っている人はあまりいないそうです。食の文化の違いに驚きましたが、同じようにベトナム人であるタムさんも日本人の食文化に驚いたそうです。日本では生卵をご飯にかけて食べる卵かけ御飯や生魚を食べるといった生物をそのまま食べることが一般的ですが、ベトナム人にはそのような食文化は衝撃的だそうです。

自分が普通だと思っていることでも他の国の人や他の文化を持つ人にとっては理解が難しいことがあるいうことを改めて実感しました。自分の考えだけで物事を判断するのではなく、他の考えを柔軟に取り入れる姿勢が異文化交流にとってとても重要だなと思いました。

国際コミュニケーション学科１年　石丸　真有

食と命の授業

　鳥をしめる作業をしているのを初めに見てなぜかわからないけどとても悲しくなりました。生きている生物を目の前で殺すという場面をはじめてみてとても怖くて残酷なことだと思いました。しかし、いつも食べているものだし、普段生肉も買って料理しているのに不思議な気持ちになりました。実際に鳥をしめる体験をして、毎日自分が命をいただいていることを改めて感じました。廃棄の食べ物が多くなっている時代にこのような体験ができて、食べ物の大切さを感じることができてよかったです。

日本文化学科１年　Tran Thi Tam

食と命の授業

　私はベトナム人なのに鳥を〆るのは初めてでした。生きている鳥を〆めることは簡単ではないと思いした。毎日スーパーで鶏肉を買って食べて、普通なことですが、でも私達が食べるまでにすごく難しいことがあるのがわかりました。これは鳥を〆ることです。もっと感謝する気持ちになりました。

国際コミュニケーション学科１年　浜崎　友里

食と命の授業

　鳥をしめた経験は私たちがいつも彼らの命をいただいていることに対して重く考えるきっかけになった。鳥がかわいそうだとかではなく、私たちにはおいしくいただく任務があると感じた。しめるのが仕事であり、それで生活をしているから後ろ髪をひかれる思いでやっている人は少ないと思うが、彼らがいなければ私たちはスーパーできれいにパックされているものをいただけないのも事実である。これから母親となっていく私たちはいくつもの命を調理することとなり、家族の体をつくる役目なのだから、しめる経験は一番その役目の根本的な意味をもたらすと思った。さらに社会人になる前に、母親になる前に経験したことはこれからどのような大人になりたいかという思いに関してついてくると思った。

ベトナムの食について

私がベトナムに訪れて一番印象に残っている食べ物はバイミンです。研修に行く前はベトナムで食べるパンがまさかおいしいとは全く思っていませんでした。そしてパンがおいしい理由には過去にフランスに占領されていたことが影響しているという食に政治的背景が関係していることも感慨深いものだと思いました。おいしいフランスパンにいろいろな具が詰め込んであり、化学調味料は使わず多彩な味を味わえるバイミンがすきです。

国際コミュニケーション学科１年　根本　亜香里

食と命の授業

鶏を締める際に、罪悪感を強く感じました。心に残る授業でした。

普段何気なく食べている鶏肉は、どのような過程を経ているのかを知ることができた。それと同時に、命に対しての感謝はもちろんのこと、生産者にも感謝すべきと改めて考えさせられました。また、鶏の命を頂くことに対して、ビデオで見るのとは異なり、実際に体験することで多くの気づきがあることを知ることが出来た。命を食べて命をつないでいると考えさせられた良い経験となりました。

ベトナムの食について

一番印象に残った食べ物は、ホビロンでした。

最初は、食べられずにいたが、夜であまり、見えなかったので、食べれると思い食べました。味は、ゆで卵の味と鶏肉の味がしました。食感は、ゆで卵の食感と、鶏肉の食感がしました。骨も形成されており、コリコリとした部分もありました。想像していた味と食感とは異なり、とても美味しかった。塩と胡椒を付けるとより、はっきりとした味になり、臭みが消えました。

また、子どもの家でも、うずらのホビロンを頂きました。その時は、夜ではなかったので、うずらの体や血管が見え、少し抵抗がありましたが、美味しく頂きました。

ホビロンの説明を聞いた時、食べたくないと思っていましたが、いざ、食べてみると様々な食感と味が楽しめて美味しかった。このことをきっかけに、ベトナムの一風変わった料理も挑戦することが出来、美味しい体験を味わうことが出来ました。

日本文化学科１年　佐藤 由理

ベトナムの食について

私はこの研修で麺類を食べることが多かった。ベトナムの麺は毎日食べても飽きないくらい美味しいと思う。そこで今回ベトナムの麺類を紹介しようと思う。

ベトナムには主に4種類の麺がある。「フォー」「ミー」「フーティウ」「ブン」の4種類である。

「フォー」は主に米粉でできた麺であり、つるつるとして弾力のある麺である。ベトナム料理として有名であるが、もともとは北部のハノイの料理である。

「ミー」は中国のラーメンやカップラーメンのような麺をしていて、揚げた麺でできている。

「フーティウ」は米粉でできている麺が太麺になっており、きしめんのような形になっている。例えるならマロニーちゃんのような感じである。

「ブン」はいろいろな種類があるため一様に表現しがたいが、「ブンボー」の中で、有名な料理として「ブンボーフエ」というものがあり、フエで私達も食べた。細麺のうどんのような感じだった。

どの麺類もだいたいスープはパクチーとネギが入っており、あっさりしたスープである。ここにお好みでチリソースや唐辛子などを入れるとまた違った美味しさがあり、二重にスープの味を楽しめる。また、鶏肉は「ガー」、豚肉は「ボー」というので、例えば鶏肉のフォーであれば「フォーガー」という名前になる。ちなみに、麺を野菜と炒めて焼きそば風になっているものに、サオ(xao)というものがあり、例えばミーの焼きそばは「ミー サオ」という名前になる。

ベトナムには麺類を売っている屋台がたくさんあり、名前がわかるようになってからは、屋台の文字などがわかるようになって街中を見るのがとても楽しかった。もし、ベトナムに行く機会があれば実際にこの４種類の麺類を全て食べていただきたい。どの麺も違ったおいしさがあるので、是非味わってみるとよいだろう。

日本文化学科３年　吉田　早希

食と命の授業

鶏の屠殺はベトナム研修で一番の衝撃でした。いつも食べている鶏肉が命であるということを再確認した時間でした。まず、鶏がいて心なしか元気がないと感じました。子どもの家の従業員や子どもたちにとっては普通の光景である様子でした。そしていざ〆る時、羽を踏んで、くちばしを掴んで、首の羽をむしって、首を切るのが本当に心苦しかったです。血抜きの時の鶏の顔は今でも鮮明に覚えています。それでも時折動く鶏たちを見て、いつも私たちが食べている肉は生き物だと思い知りました。スーパーで売っている肉＝鶏はわかってはいても本当の意味で理解していなかったのかもしれません。私たちは肉を食べるから、かわいそうだからやめる、というわけにもいかないわけです。だから出された食事はきちんと食べよう、命をくれた生き物に感謝しようと強く思いました。また、肉を提供する裏側には屠殺をする人が必ずいます。日本ではその人が生き物を〆る心苦しさを担っています。私たち消費者はこうした命の流れを知るべきだと思いました。最後に、命を提供してくれた鶏ありがとう！

ベトナムの食について

ベトナムの食という点で特記したいのは、「麺」「香り」「生き物」です。

「麺」といえば代表的なものはフォーですが、実際にはいくつか種類がありました。米粉でできているものがほとんどで、少し平べったくてさらっと食べられるものやうどんのようにコシがあるものもありました。スープは基本的に薄味で、好みで香草や唐辛子を入れます。ベトナムの唐辛子はとても辛く、多めに入れると後悔します。肉もお店ごとに異なり鶏肉・牛肉両乗せやつくねのようなもの、豚足とさまざまで、どれもおいしかったです。特に豚足のものは沖縄そばに近いものがあると感じました。

「香り」はパクチーから名前のわからない葉っぱまで多様な香草が印象的です。来てすぐはあまり慣れなかったのですが、日が経つにつれて自ら丼に入れていくようになりました。葉っぱごとに香りや味が異なり、いろんな香草を試してみたくなります。また発酵品が多く見られ、すっぱいにおいがよくします。ベトナムは食の香りが豊かだと感じました。

「生き物」はあらゆるものを食べました。部位としてもヤギの脳みそだったり、豚の血だったり、有精卵だったり日本では食べられていないものばかりでした。有精卵ホビロンは子どもの家で食べるときに子どもたちが躊躇なく3、4個食べているのを見てさらに驚きでした。ベトナムでは屠畜する環境が身近にあり、生き物をいただくという意識が小さい頃からできているのかもしれません。

どうしても生き物と肉が結びつかず、私はなかなか慣れないままでした。食べている肉は、生き物であることを忘れずにいたいです。

衝撃も多かったベトナム食ですが、ベトナムらしい食文化が色濃く残っていると感じました。ベトナム、ごちそうさまでした。

日本文化学科１年　菅原 菜美

食と命の授業

鶏をしめることは見たこともやったこともなかったためすごく抵抗があり辛かった。昼食で自分たちがしめた鶏肉が料理としてでてきたが口をつけられなかった。どんなに安くても、冷凍の不味いものでも、すべての食べものがこのような工程を経て私たちの食卓に並び食べているということ、「命を頂いている」ということを忘れてはいけないと感じた。すごく辛い時間ではあったが一生に一度でも貴重な体験ができ、食べることについて考え直すきっかけとなったので良かった。

ベトナムの食について

ベトナムはとにかく辛いイメージがあったのでどれも美味しく食べられてよかった。とくにフォーなどの麺類のスープがどれもダシのきいた優しい味で良かった。魚醤は日本の醤油に比べて少し甘く様々な料理に合うと感じた。フエでの滞在が長かったためホーチミンに来たときは味が濃くて驚いた。ベトナムも日本と同じように南北に長い国であるため地域によって味が変わり興味深かった。

国際コミュニケーション学科１年　古谷 理恵

食と命の授業

私は、昨年の夏に大学の研修で行ったラオスの村で、生きた状態から鶏を殺し、調理し、いただくまでを見た。その時は死んでしまった鶏に触ることが怖くて、ただ見ているだけで終わってしまった。しかし、今回は違う。自分たちで鶏を鳥肉に変えなければならない。この体験をしてみて、普段はおいしいとだけ感じて食べ終えてしまっている鳥肉だが、その感覚だけで終わらせてはならないものだと分かった。どういう過程で自分の口の中に入れられたかを考える必要があると思う。生きているものを殺すということは、覚悟がいるし、辛いことだ。しかし、人間も他の動物も何かの犠牲の上に生きざるを得ない。それならば、せめていただく生き物や調理してくれた人に、感謝をして食べるべきだ。

生まれた時から人間に飼われ、食べられる為に飼育される命。命って何だろうと考えさせてくれた。しかし、考えても答えはまだ私の中では出せていない。この体験はなかなか出来ないし、自分から進んでやろうとは思わないものだ。毎日使う「いただきます」と「ごちそうさま」。この言葉の意味を今まで以上にかみしめて、使うことが出来るはずだ。

ベトナムの食について

ベトナムと言えば、フォーなどの麺類。様々な種類の麺があり、歯ごたえや色も違った。そのような料理の中で最も気になったことが、タレの種類と香草などの葉っぱの種類が多いことである。唐辛子が入った辛いタレ、ヌクマムと呼ばれる魚醤のタレは定番であったが、それ以外にもこの食べ物の時にはこのタレ、というように分かれていた。また、香草もパクチーが有名であるが、きゅうりの葉やミントなどたくさんの葉っぱが出てきた。何よりも驚いたのは、どのタレを使うとこの料理はおいしくなるのか、たくさんある香草の名前がどんなものか、ガイドの方をはじめベトナムの人は理解しているということだ。どういうものを使えば、より味が引き立つかを工夫して知恵として蓄えていくのだろうか。私の普段の生活を思い返してみても、あまり考えずにその場その場で食べ物に合う調味料や付け合わせを作ってしまっている。こういうところからも、ベトナムのアクティビティの結果で、５基本味の味覚を考える結果が高かったのかもしれないなと思った。

おいしいというだけではなく、何を合わせて食べるかも考え、自分が食べているものがどういう名前でどんな味がするのかも食べ物の調理の一環に入っているのだなと学んだ。私のこれからの人生で味わう食事がさらに良いものとなると思った。

国際コミュニケーション学科１年　雲田理愛

食と命の授業

生き物の命をいただくことを通して学ぶ食育があるというのは、知識としては知っていました。しかし、実際に体験してみると衝撃的で、“命をいただいているんだ”と実感しました。そして、日本の子ども達に、この体験をしてほしいと考えるようになりました。それには理由があります。

1つめの理由は、加工される前の肉の形を見ることができるからです。

日本のスーパーでは、肉が全て加工されパック詰めされています。そのため、私達はかつて命だったものをいただいているという実感を持ちにくいです。しかし、日常的に命をいただいているにも関わらず、加工される前のものを見るのは非日常というのは、問題ではないでしょうか。私は、命を大切にするためにも、家庭の食卓に肉が届くまでの工程を知るべきだと考えます。

２つめの理由は、生き物を殺めることで罪悪感を持つからです。

私は鶏をしめる際に、首をもつ係りをしました。生きている鳥の首は勿論暖かいし、喉を切っている間に暴れられ、その力強さに何度も手を離しそうになりました。その後数日は、手に鶏の首の感触が残りました。

日本では死に触れることが、強くタブーとされているように感じます。勿論、子どもの教育において良くない面もあります。しかし、必要以上に死に触れさせないのは正しいと言えるでしょうか。私はある程度は触れるべきではないかと考えます。なぜなら、死に触れることで、命のありがたみや尊さが分かるからです。

これらの理由から、私はこのような授業を日本の子ども達も受けた方が良いと考えます。

ベトナムの食について

このレポートで私は印象に残った料理と、発見したことを述べたいと思います。

まず、私が1番印象に残った料理はフォーです。ベトナムの代表的な料理ということで元々関心があったのですが、実際に食べてみると塩味や具の旨味が効いていて、とても美味しかったです。また苦味や甘味はほとんどなく、酸味が少しあったように感じました。

次にベトナムの料理と日本の料理を比較して、発見した３つのことについて述べたいと思います。

１つは日本と違いベトナムの料理は風味が強いということです。たとえば香草は沢山の料理に使われています。フエの前半の日程に食べたフォーには、パクチーなど様々な香草が使われていました。一方日本の料理にはベトナム料理ほど風味はありません。この異なる点は面白いなと感じました。

２つめはベトナム料理には、日本料理と同様に米を使ったものが多いということです。たとえば、ライスペーパーや米を使った生春巻きなどがあげられます。日本でも主食である米を餅や団子など様々な形に加工して食べていることから、この点は同じなのだと思いました。

３つめはベトナムの料理は塩味が強いということです。ライスペーパーやフォーなどがあげられると思います。暑い地域だから、塩味の強い料理が多いのかな、と感じました。

国際コミュニケーション学科　世良　新菜

食と命の授業

普段私たちは鶏を使った料理を多く食べているため、今回初めて屠殺した経験は大変貴重であった。豚を屠畜する様子はテレビで見たことがあったが、映像で見るのと実際にやるのでは大きな違いがあった。初めに、生きている鶏が人間に殺されるのを恐れて叫んでいる様子を見ることは辛かった。私たち人間が生きていくためには動物やその餌である植物の存在がなければならないことはわかっていたが、それでも自分の手で屠殺するとなると恐ろしかった。他の人が屠殺する様子を見て私もやらなければならないと覚悟を決めて行った。〆る際に、鶏が必死に抵抗しようとしていた様子は今でも忘れられない。生きている鶏は触るととても暖かく、命を自らの手で感じられた。

屠殺を終えてみて、その鶏を実際に調理して食べたのだが、改めて命の大切さを学んだ。ご飯を食べる前に日本では「いただきます。」と言うが、その言葉は毎回絶対に言わなければならない言葉であると感じた。常に命の尊さを意識し、ご飯を残してゴミになるというようなことにはならないよう、なるべく残さないように心掛けるべきであると思う。

屠殺をすると先生から聞いたときは、正直ただただ怖くて何でしなければならないのだろうと初めは思っていた。しかし、自ら屠殺することを通して、改めて調理する方への感謝はもちろん、料理が出来上がるまでの過程に携わる全てに感謝しなければならないことを再確認できた。日本では屠殺はなかなかできないため、ベトナムでの経験はとても得るものが多かった。

日本に帰国しても、今回吸収したことを忘れないようにしっかり心に留めたいと思う。〆ることを学生に是非やってほしいと提案した先生をはじめ、用意してくださった子どもの家の職員に感謝致します。

ベトナムの食について

ベトナム研修を通して、様々な種類の料理を食べた。その中でもベトナムの名物と言えるフォーを例にして感想を述べる。フォーという一つの料理であっても、お店によって味は異なった。スープはもちろん、お肉、麺の硬さやコシに違いがあった。また、ベトナム料理は野菜を豊富に利用しているという印象を受けた。例えば、日本ではなかなか使わない香草を食べる機会が多かった。香草をフォーに入れることで、味がまたガラッと異なったので、不思議であった。フォーだけでなく、日本でいううどんの麺も食べたのだが、フォーとはまた違い、麺にコシがあって大変美味しかった。

今回は日数の関係から、フエで食事する機会が多かったが、ホーチミンと比較すると、同じベトナム国内の中でも、地域によって味付けが異なっていると感じた。元々、先生や現地の方がフエの

料理が一番美味しいと言っていたが、私も同感した。ホーチミンの料理ももちろん美味しいのだが、フエの味付けの方が日本と近く繊細であるような気がした。魚や野菜の味を活かすような料理が多かったと思う。

フエ高等師範大学では、学生にA～Hのコップに五味を認識できるかという味覚テストを行った。私と一緒に行った学生のデータだと、苦味は難しかったようだが、甘味や旨味を認識する力に優れていた。テストを行う前は、日本料理をイメージしてみると、旨味は日本人の方が優れていると考えていたが、ベトナムの学生も優秀であった。この結果はフエの料理の繊細な味付けによる結果なのではないかと感じた。ホーチミンで同じテストを学生に行ったら、どのような結果になるのだろうという興味がある。苦味を認識するのが難しかったのは、おそらくベトナム人は苦いものが好きではなく、ベトナムコーヒーにも多くの砂糖を入れるということが一つの要因なのではないかと考えた。

最後に、多くのベトナム料理を食べて毎日楽しんだこと以外に、味覚テストを通して味わいの面から日本とベトナムの比較ができて勉強になった。ベトナムは同じアジアであるが、欧米諸国ではどのような結果になるのか、今後比較できるとより理解が深まると感じた。

日本文化学科３年　南　菜津香

ベトナムの食について（お米、やぎ、香草について）

はじめに、ベトナムのお米についてです。ベトナムではお米が主食とされていて、日本スタイルの炊いた白いご飯、フオーというお米から出来た麺なども食べられています。フオーは基本的に白く、形はさまざまあり、今回食べたのは平たいタイプ、細い素麺のようなスタイル、そして、うどんのように太麺のタイプです。太麺のタイプは、日本のうどんのようにツルッとしていて、コシがあってうどんのような食感を楽しめました。

ホーチミンではやぎ焼肉、鍋を食べました。そこのお店では、お肉の臭みをなくすためにたくさんの香草で作ったタレに漬けたものが出てきました。お肉を口の中に入れると香草の香りがある中、ほんのりやぎの特有な匂いがありました。ジンギスカンとはまた違った匂いだった気がします。また、やぎの乳の部位のお肉は、とても美味しく、コリコリした食感で、部位の場所を聞いて驚きましたが、馴染みのあるような食感と味わいでした。焼肉のタレとして腐らせた豆腐をペースト状にしたものに付けて食べました。鍋の方では、やぎの脳みそを入れました。日本では滅多に食べるこ

とのできない部位ですが、食べてみるとなめらかな下触りで、鱈の白子に近い食感と見た目で、鍋で煮てしまうとさほど抵抗ないような状態でした。

ベトナム料理では欠かせない香草は、滞在中でもたくさんの種類を食すことができました。特に美味しかったのはパクチーとレモングラスです。2 種類ともに、とても香りは強く、よくフオーやサラダに入っていました。香りが強いので、口の中に少し入れるだけでも十分に香りを楽しむことができます。また香草の中でも、ドクダミが食べられていたことに驚きました。日本のドクダミはとても香りが強くて特徴のある匂いを持っています。少し口の中に入れるだけでもパクチーやレモングラスのように香りが強く出てきます。また香草は健康面でも非常に良く、ベトナムの人々はこれをほぼ毎日摂取しているので、健康に対する意識は強いのでは、と思いました。

国際コミュニケーション学科1年　藤本そのこ

ベトナムの食について

ベトナムの食事は基本どれも美味しかった。あまり脂っこくなく、味付けも濃すぎないので、食べやすかった。ベトナムのフォーは日本で食べたものよりも、麺が薄くて味もあっさりしていた。うどんとは違ってコシはない。香草をスープに浸すと匂いが増した。

ベトナムで日本と同じ感覚で辛い調味料を入れると、あまりにも辛かった。

ベトナムの食品はどれも似たような味がした。私にとっては苦手な匂いもあった。それは市場で嗅いだものと同じものだが、どうやらジャックフルーツというベトナムのフルーツの臭いらしい。調味料やお菓子も似たような味がするものが多かった。

ベトナムにも醤油があったが、日本の物よりも塩辛くて私は苦手だった。

ベトナムには卵を受精させて、鳥になりかけの状態のものを茹でて食べるチュンベットというものがあった。日本では見慣れなくて、見た目が完全に鳥になっているものもあり食べるのに抵抗があったが、食べると濃いゆで卵の味がした。

ベトナムのコーヒーはそのままだとかなり苦いが、1対1くらいの割合で練乳を入れるので、とても甘かった。濃厚だった。

ベトナムの家庭料理はどれも優しい味だった。野菜の炒め物や魚のフライ、卵と肉を焼いたオムレツみたいなものも、日本の食事と似た味で食べやすかった。ベトナムのお米はタイ米なので日本のものより細長かった。ボソボソしていて米ぬかが取りきれていないような味だった。お米で作った料理が多く、食べ方も様々だった。お餅みたいなもの、ライスペーパー、フォー、バンベアなどだ。ベトナムはかつてフランスの植民地だったので、フランスパンがどこにでもあった。バインミーというお肉や香草などが挟んであるサンドイッチがあった。ベトナム人はフォーと同じくらいそれをよく食べているという印象だった。ベトナム人はおやつ代わりにスイカの種をよく食べていた。スイカの種を歯で割り中の果肉のようなものを食べる。味は大豆に似ていた。歯で殻を割るのは難しかった。市場の人も学校でも仕事中でもよく食べていた。ベトナムの庶民的なレストランは、どこもボリューム満点だった。日本人は全て食べきろうとする習慣があるが、ベトナムでは残した方が礼儀としては良いらしい。

箸文化は日本と一緒であるが、日本は使い捨ての割り箸が多いが、ベトナムではどこのレストランも箸は使い回しのようだった。

フルーツジュースはどれも濃厚だった。スイカジュースはどこにでもあった。フエのビールは比較的苦くなく、炭酸も弱くて飲みやすかった。ベトナムでスープを食べるときは、お茶碗によそったご飯の上にかけて食べるのが普通。つい白米が進んでしまう食べ方だと思った。

フエに比べホーチミンの料理は全体的に味が濃かった。

ベトナムの甘いものは日本と比べると甘さが強い。牛乳やオレンジジュースにも甘味料が入っていて、カフェラテは砂糖なしと言わなければ、甘かった。

ベトナムでたくさんの食べ物を経験することができて良かった。ただ美味しいという感想だけではなく、１つ１つのものを味わって、好き嫌いをせず食べることが大切だと思った。これから生きていく中でたくさんの食べ物を経験して、味わっていきたいと思った。

ベトナムで感じたこと

まず最初に感じたのが、ベトナムは独特の匂いがあるということだ。特に市場はタバコや肉、香草などが混ざったような匂いがした。私はジャックフルーツという果物の匂いが苦手だ。

そしてバイクのクラクションの音も気になった。ベトナムはとにかくバイクの量が多く、そこら中でクラクションが鳴り響いていた。

そして道路を渡るときは、走ると危険でゆっくり歩かなければならない。事前にそのように説明された時は意味がわからなかったけれど、実際にベトナムに来て渡ってみると、バイクの方が避けてくれるということがわかった。

また, 交通量が多く、空気があまり綺麗ではないから、マスクをしている人が多いのだが、そのマスクの柄が様々で派手だった。そして日本のものと違って完全に布でできていて、形が特徴的である。

次に感じたことは、ベトナム人の接客は基本優しいのだが、お客さんが居なければ普通に座ったりしゃがみこんだり、食事をしたり、寝たりしている。そしてお客さんが入ってくると近づいてきて、お客さんが行くところにずっと付いてくる。そして今まで何もしていなかったのに、商品を綺麗に並べたり掃除をし始める。そしてお客さんが出て行くとまたすぐ休む。日本ではありえないことだけれど、ベトナムではそれが普通であるのが不思議だった。なんだか気が張り詰めていなくのんびりしていてベトナムらしくて良いと思った。

さらに感じたことは、ベトナム人は基本相手のことをあまり考えていないということだ。並ぶときは少しでも間を空けるとすぐ抜かしてくるので前の人とぶつかるくらい詰めて並ばないといけない。エレベーターは降りる人がいるのにドアの目の前で待っていてすぐ乗り込んでくるし、人と人の間を通るときなどはすぐ押してくる。

一番驚いたことは、食事をした時に出るゴミを床に落とすということ。レストランでも子供の家でも学校でも、食べカスなどを床に直接落としていて驚いた。結局は掃除をしなければならないのだからどうして直接ゴミ箱に入れないのだろうかと思った。

急激に発展してきた国なのでまだまだ行き届かないサービスや物が多いけれど、ベトナム人は優しくて、勤勉で、自由で、住んでいて気持ちの良い国だと思った。

ベトナム海外研修を終えて～品川　明

（環境教育センター・平成２６年度研修担当）

　ベトナム国際協力研修を振り返り、参加した学生はいろいろなことを感じ、様々な視点に気づいたと思います。

フエのドンバ市場の見学では、日本に無いものばかりで、独特な匂いや発酵食品の多さ、ベトナムの風土や環境に培われた食に市場は溢れていました。日本と違うことは、気温が高いにも関わらず冷蔵した食はないということです。また、野菜や果物はベトナムで生産せれるものが多く、郷土の食を郷土の人が楽しんでいました。

学生は、食欲が旺盛で、ほとんどの食を積極的に食べていました。ベトナムの風土に合った食は薄口で豚肉のダシを中心としたスッキリした味わいがあります。それらに香草やヌクマムなどの魚醤をつけて、学生たちは味の変化を楽しんでいました。また、明るく自分の気持ちを素直に表現出来る学生であったと思います。疑問点を見出し、その疑問をベトナム戦争体験者のニエンさんや小山さんに質問していました。その積極的な姿勢については、ニエンさんや小山さんが学生たちの資質の高さに感嘆しておりました。

子どもの家での食と命の授業では、ベトナムの生活文化や食文化を直接体験しました。体験した多くの学生が次のように感じたようです。

「いただきますやごちそうさまという言葉が、今までより気持ちを込めていうようになった。普段食べている鶏肉が、どのような過程を経ているのか知ることができた。命に対する感謝、生産者や肉にする人や料理する人にも感謝すべきと思った。命を食べて命を繋いでいることを考えさせられた経験でした。」

少数民族、小学校の児童、障害児や同じ世代の大学生との交流を通じ、多くのことに気づいたと思います。教えられるのではなく、自分自身で自覚した気づきが学生のこれからの糧になると信じます。

このベトナム研修を遂行するにあたり、多様な企画を計画し、終始積極的に対応して頂いたピースインツアーの小山耕太氏、フエでは、ソンさんやハンさん、子どもの家のスタッフの方々、JASS 代表の小山道夫氏、ホーチミンではサウさんや佐藤さん、訪問先のすべての関係者にこの場を借りて、感謝申し上げます。素晴らしい体験をご提供頂き有り難うございました。（志染）